

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第31集

太田遺跡

一般国道497号松浦佐々道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第31集

太田遺跡

一般国道497号松浦佐々道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

長崎県教育委員会



写真1 遺跡遠景（北から。竜尾川下流より内陸を望む）



写真2 遺跡遠景（南から。星鹿半島を望む）



写真3 調査区全景（上が北）



写真4 SL5 半裁状況（北西から）



写真5 SD1 土層断面状況（北から）



写真 6 土師器壺・壇（602・630・680）出土状況（南東から）



写真 7 出土須恵器・土師器

刊行にあたって

本書は、一般国道497号（西九州自動車道）伊万里松浦道路建設に伴い平成30年度に実施した太田遺跡の発掘調査報告書です。

太田遺跡は、松浦市西部を流れる竜尾川の本流と支流が合流する地点に所在する遺跡です。この度の発掘調査では、多数の弥生土器片とともに、古墳時代につくられた須恵器の蓋壺や壺、土師器の壺や壺、高壺・小型丸底壺・瓶・模倣壺などが出土しました。また、焼土を伴う遺構が8基確認されたほか、溝状遺構や土坑も確認されました。

旧河川の川岸にあたる立地条件や、そこに点在する須恵器・土師器の蓋壺や壺、壺の器種構成からは、いわゆる「川辺の祭祀」をも想起させるようなものでした。

最後になりますが、この発掘調査にあたってご協力いただいた松浦市教育委員会文化財課をはじめとした多くの関係者の皆様方に深く感謝を申し上げますとともに、この調査成果が学術的に広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成31年3月

長崎県教育委員会教育長

池松 誠二

例　　言

1. 本書は、一般国道 497 号伊万里松浦道路（西九州自動車道）建設工事に伴い実施した、太田遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本書は平成 30 年度一般国道 497 号伊万里松浦道路（西九州自動車道）建設工事に伴う太田遺跡発掘調査報告書作成費にもとづいて発行した。
3. 本調査区は、長崎県松浦市御厨町に所在している。
4. 本事業は国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所が事業主体となり、発掘調査主体は長崎県教育委員会が、発掘調査は長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センターが担当した。発掘調査の長崎県遺跡調査番号は OTA201802 である。
5. 発掘調査及び報告書作成において下記の業務委託を行なった。

　　発掘調査支援：株式会社プロレリック　　放射性炭素年代測定：パリノ・サーヴェイ株式会社

6. 本書で使用した平面直角座標は世界測地系を用いている。
7. 本書で使用した方位は座標北を用いている。
8. 本書で用いた遺構略号は以下のとおりである。

　　焼土を伴う遺構 …SL　溝状遺構 …SD　土坑 …SK

9. 発掘調査に係る現地指導、情報・資料提供など以下の方々にご指導・ご協力いただいた（敬称略、五十音順）。

　　合澤哲郎（松浦市立埋蔵文化財センター）　内野義（松浦市教育委員会事務局 文化財課）　川道寛（長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所）　早田晴樹（松浦市立水中考古学研究センター）

10. 本書に収録した遺物の実測および製図は、長崎県埋蔵文化財センターが行った。
11. 本書に収録した遺物、図面、写真類は長崎県埋蔵文化財センターに保管している。
12. 本書の編集・撮影は千原和己が行い、第Ⅷ章自然科学分析の 2. 黒曜石産地推定を片多雅樹（長崎県埋蔵文化財センター調査課）が、その他については千原が執筆した。なお、第Ⅷ章の 1. 放射性炭素年代測定については業務委託先から提出されたものである。
13. 本書に掲載した周辺表層地質図は、国土調査による『5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査（表層地質図）「唐津」「平戸」長崎県（1974）』を使用し作成したものである。引用元 URL：国土交通省国土政策局国土情報課ウェブサイト <http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/data/G/4205G.jpg> <http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/data/G/4222G.jpg>
14. 本書に掲載した周辺遺跡分布図は、国土地理院コンテンツの標準地図及び傾斜量図タイルを使用し加工して作成したものである。引用元 URL：国土交通省国土地理院ウェブサイト <https://maps.gsi.go.jp/#13/33.351989/129.667986/&base=std&ls=std%7Csloemap%2C0.5&blend=0&disp=11&vs=c1j0h0k010u0t0z0r0s0f1&d=v>

本文目次

I. 遺跡の環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
II. 調査に至る経緯	5
1. 調査に至る経緯	5
2. 範囲確認調査	5
(1) 調査期間と面積	
(2) 調査体制	
(3) 調査内容	
III. 調査の概要	7
1. 調査期間と面積	7
2. 調査体制	7
3. 調査の流れ	7
4. 層序と地形	7
(1) 基本層序	
(2) 旧地形の推定	
5. 調査の概要	9
6. 整理作業・報告書作成	9
IV. 縄文時代の遺物	11
V. 弥生時代の遺物	12
VI. 古墳時代の遺構と遺物	15
1. 遺構	15
(1) 焼土を伴う遺構 (SL2～8)	
(2) 溝状遺構 (SD1)	
(3) 土坑 (SD1)	
2. 遺物	17
(1) 土師器	
(2) 須恵器	
VII. その他の遺物	21
VIII. 自然科学分析	25
1. 放射性炭素年代測定	25
2. 黒曜石产地推定	28
IX. 総括	29
1. 縄文時代	29
2. 弥生時代	29
3. 古墳時代	29
4. 古代以降	29
5. 小結	30
【参考文献・資料】	30

図目次

図 1 周辺表層地質図	2
図 2 周辺遺跡分布図	3
図 3 トレンチ配置図	6
図 4 TP1・TP2・TP17 土層断面図 (S=1/100)	9
図 5 発掘体験実施状況	9
図 6 遺構・遺物分布図 (S=1/200)	10
図 7 縄文時代石器実測図 (S=1/3)	11
図 8 縄文時代石器実測図 (S=1/3)	12
図 9 弥生土器実測図 (S=1/3)	12
図 10 弥生土器実測図 (S=1/3)	13
図 11 弥生土器実測図 (S=1/3)	14

図 12 SL2・SL3・SL4 実測図 (S=1/20)	15
図 13 SL5・SL6・SL7・SL8 実測図 (S=1/20)	16
図 14 SD1 実測図 (S=1/40)	17
図 15 SK1 実測図 (S=1/20)	17
図 16 土師器 602、630、680 出土状況実測図 (S=1/10)	18
図 17 土師器実測図 (S=1/3)	18
図 18 土師器実測図 (S=1/3)	19
図 19 須恵器実測図 (S=1/3)	20
図 20 用途不明石製品・黒色土器・ 石鍋補修材・貿易陶磁器実測図 (S=1/2)	21
図 21 曆年代較正結果	27
図 22 黒曜石产地推定判別図	28

表目次

表 1 周辺遺跡一覧	3
表 2 SL一覧	15
表 3 弥生土器一覧	22
表 4 土師器一覧	22
表 5 土師器・須恵器・貿易陶磁器一覧	23
表 6 石器一覧	24
表 7 放射性炭素年代測定結果	27
表 8 黒曜石产地推定分析結果	28

写真目次

【卷頭図版】	
卷頭図版 1	
写真 1 遺跡遠景 (北から。竜尾川下流より内陸を望む)	
写真 2 遺跡遠景 (南から。星鹿半島を望む)	
卷頭図版 2	
写真 3 調査区全景 (上が北)	
卷頭図版 3	
写真 4 SL5 半裁状況 (北西から)	
写真 5 SD1 土層断面状況 (北から)	
卷頭図版 4	
写真 6 土師器壺・壇(602・630・680) 出土状況 (南東から)	
写真 7 出土須恵器・土師器	

【写真図版】	
写真図版 1	
写真 8 試掘調査 SL1 検出状況 (南から)	
写真 9 表土掘削状況 (北から)	
写真 10 調査状況 (南から)	
写真図版 2	
写真 11 TP1 北壁土層断面状況 (南西から)	
写真 12 TP1 東側拡張部土層断面状況 (南から)	
写真 13 TP2 北壁土層断面状況 (南西から)	
写真図版 3	
写真 14 TP2 東側拡張部土層断面状況 (北から)	
写真 15 TP17 北壁土層断面状況・須恵器出土状況 (南西から)	
写真 16 TP17 東側土層断面状況 (南西から)	
写真図版 4	

写真 17 7層検出状況(北から)

写真 18 完掘状況(北から)

写真 19 SD1 下層礫検出状況(北から)

写真図版 5

写真 20 SK1 半裁状況(東から)

写真 21 SL2 半裁状況(北から)

写真 22 SL3 検出状況(北西から)

写真 23 SL3 半裁状況(北西から)

写真 24 SL4 検出状況(北東から)

写真 25 SL4 半裁状況(東から)

写真 26 SL5 検出状況(北から)

写真 27 SL6 半裁状況(西から)

写真図版 6

写真 28 SL7 検出状況(北から)

写真 29 SL7 半裁状況(東から)

写真 30 SL8 検出状況(西から)

写真 31 SL8 半裁状況(北から)

写真 32 塚 601 出土状況(北より)

写真 33 須恵器壺 701 出土状況(東より)

写真 34 出土石器(縄文時代)

写真図版 7

写真 35 出土土器(弥生土器)

写真図版 8

写真 36 出土土師器・須恵器(古墳時代)

写真 37 その他の遺物

I. 遺跡の環境

1. 地理的環境

太田遺跡の所在する松浦市は、長崎県本土の北端に位置する市で、北松浦半島の一部とその沖に位置する島から構成される。市域の北には内湾である伊万里湾が位置し、その沖に鷹島や福島・青島といった島々が存在する。市域に平地は少なく、志佐川流域に沖積平野が広がっている。南には県境・市境となる山麓があり、西は平戸市、南は佐世保市、東は佐賀県伊万里市とそれぞれ接している。市域を流れる河川には、松浦市役所付近を流れる志佐川や市域東側の今福川などがあり、どれも伊万里湾へ向かって北流している。

北松浦半島一帯では、新第三紀層（佐世保層群・福井層、2200万年前）の砂岩や泥岩を基盤として、その上層を玄武岩が不整合に覆うという地質構造をなしている。この玄武岩は北松玄武岩と呼ばれしており、北松浦半島や東松浦半島、およびその周辺地域に広く分布している。玄武岩と砂岩の境界面には雨水がたまりやすく、地すべりの多い地域となっている。

基盤となる砂岩層のうち、玄武岩に覆われていない部分は雨などの影響を受け谷や川および独立丘陵となり、現在の地勢をなしている。また、市域の南側には佐賀県との県境に位置する標高777mの国見山を筆頭とした400m～500m級の山が連なっており、南高北低の地形をなす。そのため、河川はすべて北流している。

今回調査を行った松浦市西部地域では、いたる所に玄武岩台地が形成されている。太田遺跡の西側には、吉井・江迎町境の白岳山麓を水源とする竜尾川が流れ、その河床には黒色の玄武岩が露出する箇所がみられる。河口には三角州がほとんど作られず、ラッパ状に開いた三角江となっている。一帯は竜尾川の本流と支流が合流する地点で、水の確保が容易な立地である。当遺跡は、独立丘陵の裾部にある一段高い平場に立地し、下段の水田面との地形的な変換点にある。

2. 歴史的環境

太田遺跡は、松浦市役所より西に約3kmの御厨町寺ノ尾免字太田に所在する。この遺跡の近隣では良質な石材が採取できることが知られており、北側には円礫状の良質な黒曜石が産出する星鹿半島が、北東には全国でも有数の黒曜石産出地である佐賀県伊万里市の腰岳が所在している。良質な石材の入手が容易な地であったためか、北松地域一帯では多くの旧石器時代・縄文時代の遺跡が発見されている。

旧石器時代の遺跡としては、ナイフ形石器や台形石器が出土する良好な包含層が確認された寺ノ尾C遺跡や、鍵層である鬼界アカホヤ火山灰層の確認された田口高野遺跡、黒曜石原産地の星鹿半島に位置する牟田B・C・D遺跡などがあげられる。

縄文時代では、御厨町の下谷遺跡で腰岳産黒曜石から作られた製品が多く出土しており、ドングリ貯蔵穴や土坑も確認されている。星鹿半島に所在する姫神社遺跡では、昭和41年にアメリカのウィスコンシン大学と長崎大学医学部との合同調査が行われており、縄文時代前期の轟式土器・曾畠式土器や中期の阿高式土器の出土が確認された。調査については、ウィスコンシン大学のアルバート・モア氏と吉崎昌一氏によって英文で報告されている。この論文は後に福岡県教育委員会に所属していた

水ノ江和同氏によって翻訳されている。

太田遺跡近隣の田川遺跡では、つまみ形石器や石鋸などの石製品や、中期土器の阿高式土器が出土している。また、鷹島海底遺跡では、早期前葉の押型文土器の出土が確認されており、当時の松浦市域の海水位の変化に伴う生活拠点の移り変わりを推察するにあたり重要な資料となっている。竜尾川の河口に所在する下谷遺跡では、21基のドングリ貯蔵穴や土坑が確認されているほか、石鉤などの漁労具や腰岳産黒曜石を用いて作られた石器も多数確認されている。

旧石器時代・縄文時代の遺跡に比べて数は減るもの、弥生時代の遺跡も周知されている。御厨港の西の低位玄武岩台地に位置する池田遺跡では、縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての包含層が検出されており、箱式石棺墓や甕棺墓といった遺構のほか、板付II式土器や貝輪・骨製ヤスといった遺物が出土している。志佐川河口から2km程遡った河岸段丘に位置する栢ノ木遺跡では、弥生時代前期後半の甕棺墓3基、箱式石棺墓3基からなる墓域が確認されており、副葬品として内行花文鏡やガラス製小玉、軟玉製管玉が出土している。人柱川と今福川によって形成された河岸段丘上部に位置する中ノ瀬遺跡では、円形プランを持つ中期の堅穴建物跡が3基確認されており、遺跡の立地する丘陵上に集落が営まれた可能性が指摘されている。平戸市田平町里免に所在する里田原遺跡では、弥生時代の集落跡が確認されている。水門の一部や矢板を打ち込んだ護岸遺構などの水利施設や、ドングリピットなどが確認されている。遺物では木製品や甕棺の出土が確認されており、甕棺の副葬品として韓半島からの渡来品である多紐細文鏡が確認された。

古墳時代の遺跡では、今福川で形成された沖積地に位置する今福遺跡で4世紀初頭頃と6世紀後半の土師器甕や須恵器壺・高壺・甕などが出土している。志佐川流域の宮ノ下り遺跡では4世紀後半から5世紀代の堅穴建物跡が確認されている。また、弥生時代の項でも述べた栢ノ木遺跡において、完形の滑石製子持勾玉が出土している。松浦市域で確認されている古墳には、伊万里湾に面する小嶋古墳群や、福島に所在する横島古墳や小島古墳、鷹島に所在する薰崎鬼塚古墳や宝ヶ峯古墳群などがある。いずれの古墳も海岸に近い場所に立地するため、被葬者は海洋氏を束ねる立場の人物だと思われ

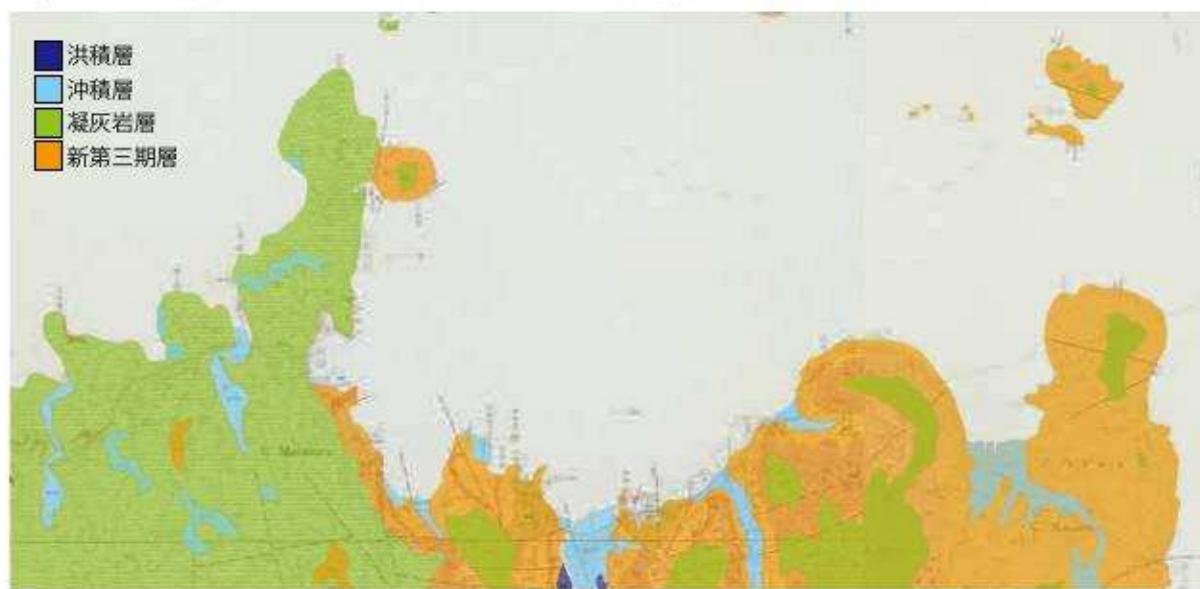


図1 周辺表層地質図 「標準地図及び表層地質図データ」(国土交通省)をもとに作成

る。これらの古墳のうち、発掘調査が行われたものは小嶋1号墳と宝ヶ峯古墳群のみであり、いずれも円墳である。主体部として横穴式石室が採用されている。

古代においては、今福遺跡より8世紀末～10世紀中頃の土師器や越州窯系青磁碗が出土しており、宮ノ下り遺跡や久保園遺跡において縄文陶器碗や越州窯系青磁碗が出土しているが、明確な遺構は確認されていない。また、現在の地名と直接つながるわけではないが、宇野御厨荘の出現もこの時期である。神仏や朝廷へ捧げる供物のことを律令制下では贊と呼んでおり、この地域でも大宰府を通じて

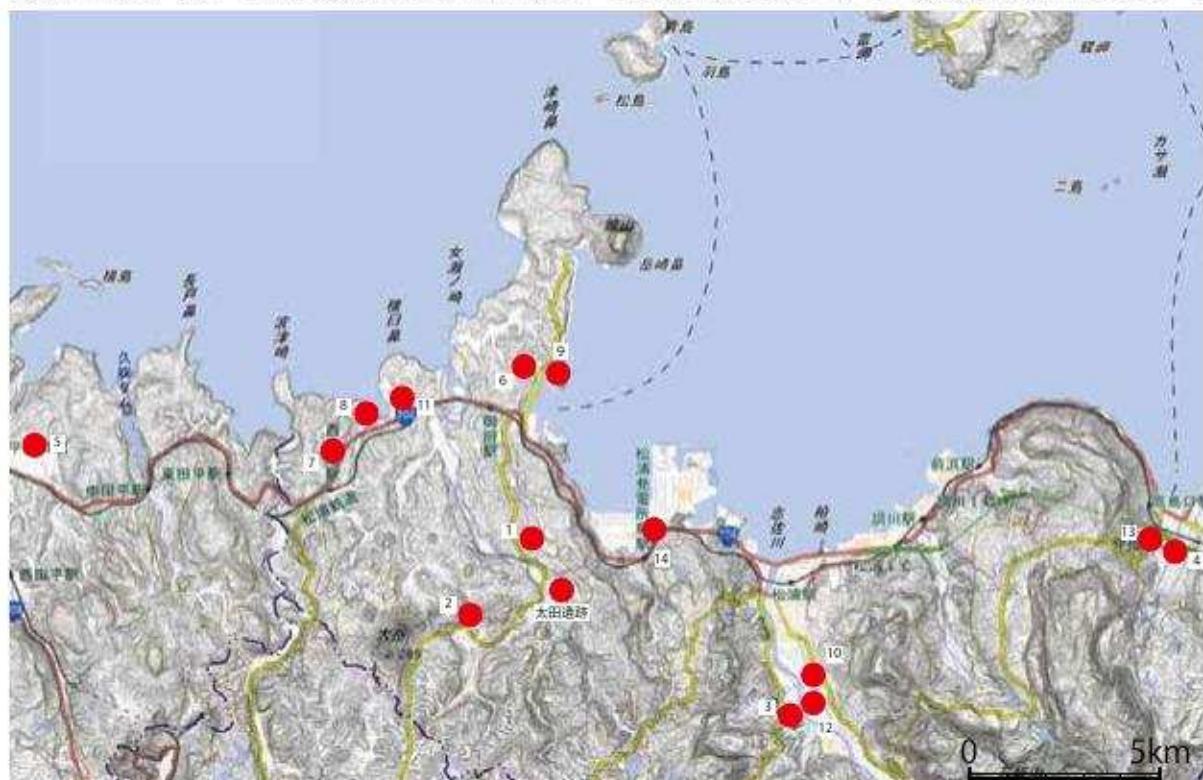


図2 周辺遺跡分布図 「標準地図及び傾斜量図データ」(国土地理院)をもとに作成

表1 周辺遺跡一覧 時代略称（旧：旧石器、縄：縄文、弥：弥生、墳：古墳、古：古代、中：中世）

遺跡名	種別	立地	時代
遺構/遺物			
寺ノ尾C遺跡	遺物包蔵地	台地・丘陵	旧・縄・弥
1 黒曜石製石器・黒曜石製削片・安山岩製削片・局部磨製石器・鍔形鏃・彫形土器片			
田川遺跡	遺物包蔵地	台地	旧・縄・中
2 ナイフ形石器・石鐵・剥片巖・つまみ型石器・石鏃・石斧・尖頭器・縄文土器・龍泉窯系青磁・天目碗・木器			
稻ノ木遺跡	集落・墳墓	台地	縄・弥・中
3 瓢箪瓶・箱式石棺墓・軟玉製管玉・ガラス小玉・青銅鏡（内行花文鏡）・土師器・須恵器・滑石製子持勾玉			
中ノ瀬遺跡	集落	平野	縄・弥・中
4 壓穴式住居跡・掘立柱建物跡・木棺墓・土坑墓/土師器・弥生土器・滑石製石錐・龍泉窯系青磁・同安窯系青磁			
里田原遺跡	遺物包蔵地	盆地	縄・弥・墳・古
5 支石墓・甕棺・貯藏穴・水門・護岸遺構/縄文土器・弥生土器・鉄器・木製縄・木製鋤・矢板・青銅鏡・装飾品			
池田遺跡	遺物包蔵地・墳墓	丘陵	縄・弥・中
6 山の寺式土器・夜臼式土器・板付II式土器・黒曜石削片・輸入陶磁器			
7 田口高野遺跡	遺物包蔵地	台地	旧・縄
8 下谷遺跡	遺物包蔵地	台地	縄
9 妙神社遺跡	遺物包蔵地	平地	縄
10 石鏃・剥片・弥生土器			
小嶋古墳群	古墳	平野	墳
11 銀環・碧玉製勾玉・ガラス製小玉・鉄鏃・矛・刀子・鉄刀・須恵器			
宮ノ下り遺跡	集落・墳墓	平野	縄・墳・中
12 黒川式土器・壺形土器・彫形土器・甕棺片・布留（古）式甕・ガラス小玉・龍泉窯系青磁			
13 今福遺跡	遺物包蔵地	平野	縄・弥・墳
14 ナイフ形石器・台形石器・石鏃・スクレイバー・石斧・須恵器・土師器・石器・輸入陶磁器			

費が献上されていたことが『延喜式』に記されている。

中世以降の遺跡では、松浦火力発電所の東側に所在する櫻楷田遺跡で、12世紀～14世紀の中世集落跡が見つかっており、掘立柱建物跡や石敷き道路といった遺構や、石鍋や輸入陶磁器などの遺物が出土している。今福川流域の中ノ瀬遺跡においては、木棺墓や土坑墓が確認されており、15～16世紀の中国・朝鮮半島の貿易陶磁器などが出土している。また、蒙古襲来の古戦場跡である、鷹島海底遺跡においては、弘安の役の際の遺物が海底に堆積し、シルト質の土壌により良好な状態でパックされている。発掘調査によって得られた考古資料と、文献や絵画によって伝えられてきた蒙古襲来の様子を相互にフィードバックさせられる貴重な遺跡であるため、平成23年度にその一部が「鷹島神崎遺跡」として国の史跡に指定されている。確認された遺物としては、元軍の船体の一部や、碇石が装着された状態の木製碇、炸裂弾の「てつはう」、刀剣・鉄兜などの武具、中国産の陶磁器などがあげられる。

現在の地名につながる「御厨氏」については、「御厨氏系図」に値嘉十郎連の子御厨小次郎並が始祖とある。代々「御厨」を姓として、御厨城を居城としていた。弘安6年8月には、「御厨熊徳」が給田一町を与えられており、この段階ですでに今日へつながる御厨の地名があったことが推測できる。室町期には、御厨氏は卓越した航海技術を用いて盛んに大陸との交易を行っている。戦国期に入ると田平城主峰昌と弟の平戸松浦弘定との対立抗争があり、激しい攻防を展開したが、大内氏の斡旋で和睦した。この結果、弘定の父である御厨資忠と子の善は御厨を追われる。その後、御厨は平戸領に吸収される。

II. 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯

平成 26 年度 2 月に実施された西九州自動車道(松浦～佐々間)建設工事に伴う現地踏査においては、今回の調査区より下段の水田部分で弥生時代の土器片が採取されており、遺物や遺構の有無の確認のため試掘調査が必要とされた。この段階では遺跡の立地より集落跡・古水田跡の存在が想定されていた。

2. 範囲確認調査

(1) 調査期間と面積

期間： 平成 29 年 9 月 25 日（月）～平成 29 年 10 月 6 日（金）

面積： 138 m²

(2) 調査体制

長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター

所長	岩永正弘
総務課長	田川正明
調査課長	川道 寛
調査課 主任文化財保護主事	松元一浩
調査課 文化財調査員	千原和己

(3) 調査内容

① 調査方法

近年まで利用されていた水田面と、そこから 2m ほど高い一段上の平場を対象範囲とし、それぞれ 8 箇所、計 16 箇所のトレンチを設定し調査を行った。確認調査の結果、水田部分および平場西側は圃場整備などによって大きく攢乱をうけていることが分かった。遺物は、平場に設定したトレンチから多量の弥生土器片や土師器片と少量の須恵器片、石器が出土した。

② 層序

- | | |
|-----|---|
| 1 層 | オリーブ褐色砂質シルト土 (Hue2.5Y4/4) しまりは強い。表土。 |
| 2 層 | 褐色砂質シルト土 (Hue7.5YR4/3 ~ 4/4) しまりは強い。造成土。 |
| 3 層 | 灰褐色砂質シルト土 (Hue7.5YR4/2) しまりは強い。拳大～人頭大の礫が多数出土。造成土。 |
| 4 層 | にぶい黄褐色砂質シルト土 (Hue10YR4/3) しまりは強い。1mm 長の焼土を 1 割程度、白色粒子を 5% 程度含む。マンガンの沈着がみられる。 |
| 5 層 | 暗褐色砂質シルト土 (Hue7.5YR3/3 ~ 3/4) しまりは強い。1mm 長の焼土を 3 割程度、2mm 長の炭化物を 1 割程度、白色粒子を 3 割程度含む。弥生土器の破片が多数出土。層下部に鉄分・マンガンの沈着がみられる。包含層 1。 |
| 6 層 | 褐色粘質土 (Hue7.5YR4/4) しまりはやや弱い。1mm 長の焼土を 5% 程度、1mm 長の炭化物を 5% 程度、白色粒子を 15% 程度含む。弥生土器の破片が中量出土。包含層 2。 |
| 7 層 | 暗褐色砂質シルト土 (Hue10YR3/3) 6 世紀中頃の須恵器環蓋が出土。TP2 の 7a 層。包含層 3。 |

8層 黒褐色粗砂質シルト土 (Hue7, 5YR3/1) しまりはやや弱い。10cm長の礫を1割含む。遺物包含層であり、弥生時代中期土器が中心。包含層3に似る。TP2の8層。

包含層としては、弥生土器片が多量に出土する黒褐色層（包含層1）・暗褐色層（包含層2）および、包含層1直下に堆積する黒褐色層（包含層3）を確認した。

調査中、包含層1において弥生時代中期土器が多量に出土するものの、それより下層から古墳時代後期の須恵器が出土したことより、包含層1は平場の上方より流れ込んだ層ではないかと考えられた。これをうけて平成30年度2月に試掘調査実施地点の東側丘陵上において試掘調査を行ったが、遺構、遺物は確認できなかった。

③ 遺構

TP2北壁7層（包含層3）下部において焼土を伴う遺構（SL1）が確認された。遺物等は確認できなかつたが、遺構周辺において被熱した礫が確認された。

④ 遺物

コンテナ2箱分（土器・須恵器約990点、石器約10点）の遺物が出土した。内訳は弥生土器片、須恵器片、黒曜石製石器剥片である。弥生土器片は中期のものが多くを占める。

⑤ 処置

調査結果から、包含層の検出された平場については本調査の必要があると判断した。

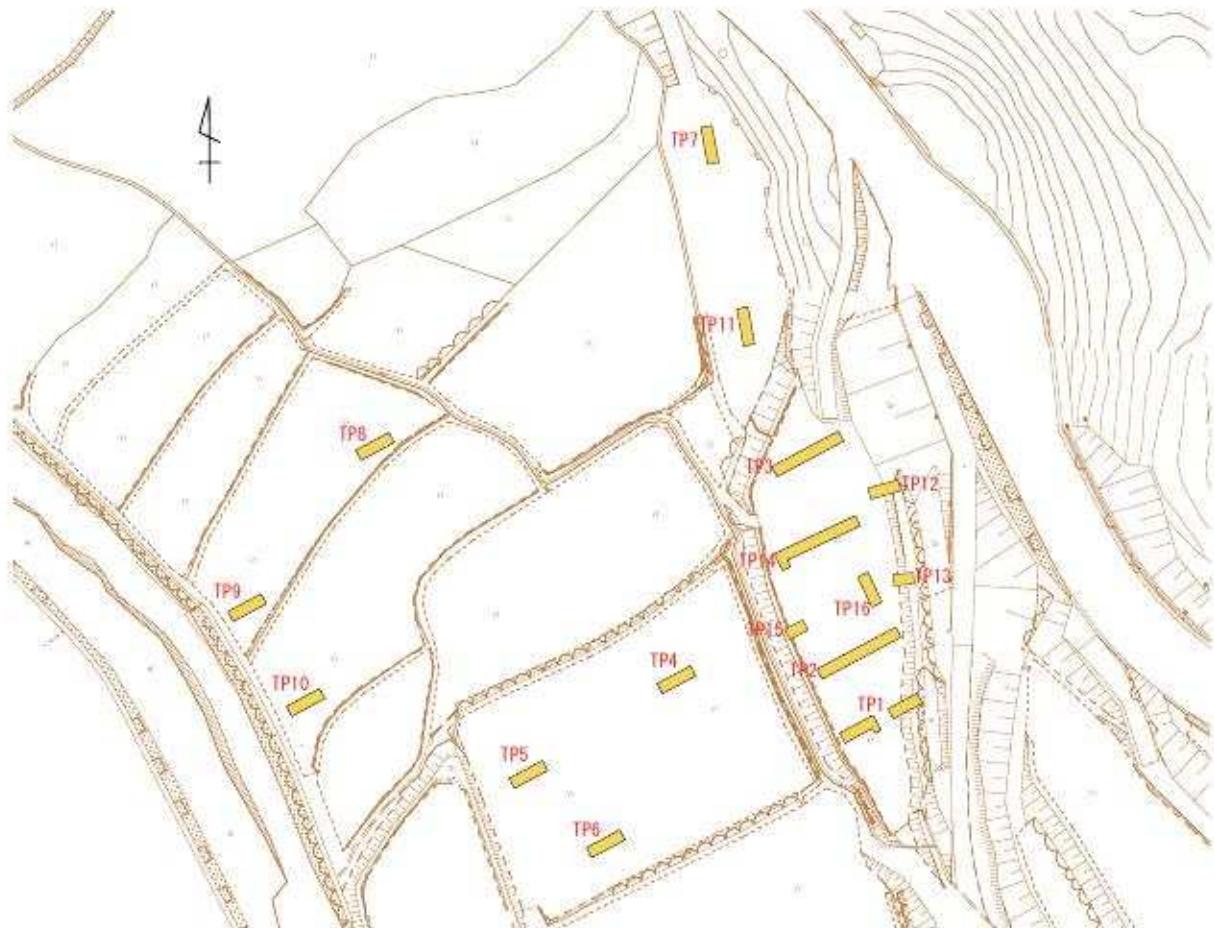


図3 トレンチ配置図

III. 調査の概要

1. 調査期間と面積

期間： 平成 30 年 7 月 4 日（水）～平成 30 年 9 月 4 日（火）

面積： 430 m²

2. 調査体制

長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター

所長	石橋 明
総務課長	田川正明
調査課長	寺田正剛
調査課 主任文化財保護主事	松元一浩
調査課 文化財調査員	千原和己

<調査支援：株式会社プロレリック>

現場代理人	山本勝也
調査員	木村有喬
調査員	村上孝司

3. 調査の流れ

調査は、試掘調査で包含層が確認された平場部分の 430 m²を対象に行った。調査区西側において造成土が確認されていたため、初めに表土と造成土をバックホウにより掘削した後、試掘調査時の TP1・2・15・16 を改めて掘りあげた。また、調査区北辺東半部の土層状況を先行して確認するため TP17 を設定・掘削を行った。調査区の層序確認については、TP1 および TP2 の北壁に沿う形でベルトを 2 本設定し、確認を行った。その後は、包含層毎に順次人力による掘削および遺構検出を行った。この TP2 北壁の土層は、各包含層や河川堆積跡などがよく残っていたため、当遺跡の基本層序を考える際の基準として用いた。

調査区は、5m × 5m のグリッドを設定し、0604D～0505D を北区、0404B～0405D を中央区、0305A～0205B を南区として遺物の取り上げを行った（図 6 参照）。詳細な位置情報記録が必要と判断したものについては位置座標を記録し、出土状況等の重要なものは写真記録を行った後取り上げを行った。

遺構は包含層毎に検出を行い、確認した遺構については、半裁し個別の土層図と平面図を作成している。各包含層上面での遺構調査が終了した後は、ローリングタワーないしラジコンヘリ・ドローンでの全体写真撮影を行った。

4. 層序と地形

(1) 基本層序

1 層 暗褐色中砂質シルト土 (Hue10YR3/3) しまりは弱い。粘性はやや弱い。鉄分沈着がまばらに見られる。層厚は 0.2m。現表土（客土）。

- 2層 黒褐色中砂質シルト土 (Hue7.5YR3/2) しまりはやや強い。粘性はやや弱い。鉄分沈着がまばらに見られる。層厚は0.8m～1.0m。近現代の圃場整備に伴う造成土と思われる。
- 3層 オリーブ褐色細砂質シルト土 (Hue2.5YR4/4) しまりはやや強い。粘性はやや強い。細片となった土器や礫を層全体に2割含む。層厚は0.1m。旧表土。
- 4層 褐色細砂質シルト土 (Hue10YR4/4) しまりは強い。粘性はやや弱い。細片となった土器や礫を層全体に2割含む。層下部は、非常に弱い鉄分沈着が層全体に見られる。上層に比べSD01-1層に似た泥を多く含み、褐灰色を呈するため、上部を5a層、下部を5b層とした。TP2の5層。
- 5層 黒褐色細砂質シルト土 (Hue7.5YR3/2) しまりはやや強い。粘性はやや弱い。細片となった1cm以下の土器や礫を層全体に3割含む。古墳時代の遺物包含層。弥生時代の遺物が多く出土。1mm大の炭化物を1割含む。層厚は0.2m～0.3m。試掘調査時の包含層1。TP1の3層。TP2の6層。
- 6層 暗褐色細砂質シルト土 (Hue7.5YR3/3) しまりはやや強い。粘性はやや弱い。細片となった1cm以下の土器や礫を層全体に1割含む。古墳時代の層だが、弥生時代の遺物が多く出土。10cm大の礫を1割含む。層厚は0.2m～0.4m。試掘調査時の包含層2・3。TP1の4層。TP2の7層。
- 7層 黒褐色細砂質シルト土 (Hue7.5YR3/1～3/2) しまりはやや強い。粘性はやや強い。砂質が強い。5cm～20cm大の礫を6割含む。角礫と円礫が混ざる。弥生土器や古墳時代後期の土師器・須恵器が出土。礫の大きさにバラつきがあることから、河川氾濫の痕跡である可能性がある。層厚は0.2m～0.3m。TP1の5層。TP2の8層。
- 8層 灰黄褐色細砂質シルト土 (Hue10YR5/2～4/2) しまりはやや弱い。粘性はやや強い。3cm～5cm大の円礫を6割含む。含まれる礫の大きさや質感が整っている。河川堆積層。中粒砂を2割含む。層厚は0.2m～0.7m。TP1の7・8・9層。TP2の9層。
- 9層 明黄褐色シルト質粘土 (Hue10YR7/6～6/6) しまりは非常に強い。粘性は非常に強い。風化礫由来の層と見られる。赤褐色粘土 (Hue5YR4/6) ブロックを含む。このブロックも自然石が風化したような様相。無遺物層。地山。TP17の25～30層。
- 10層 明黄褐色～黄褐色シルト質粘土 (Hue10YR6/6～5/6) しまりは強い。粘性は強い。地山の土よりも色が濃く質が均一。無遺物層。TP17の11層。

(2) 旧地形の推定

独立丘陵の裾部に位置する当遺跡では、古墳時代の遺物が出土する層より多量の弥生土器片が出土しているが、それらの弥生土器片の多くは磨滅している。調査地西側には竜尾川が流れしており、9層以下では河川氾濫の痕跡とみられる多量の礫が確認された。以上のことより、この場所で多量に出土した弥生土器については、河川により運ばれてきた遺物が独立丘陵の裾部であるこの地点に堆積した結果と考えられ、竜尾川の氾濫時はこの地点まで水位が上がっていたことが推察される。

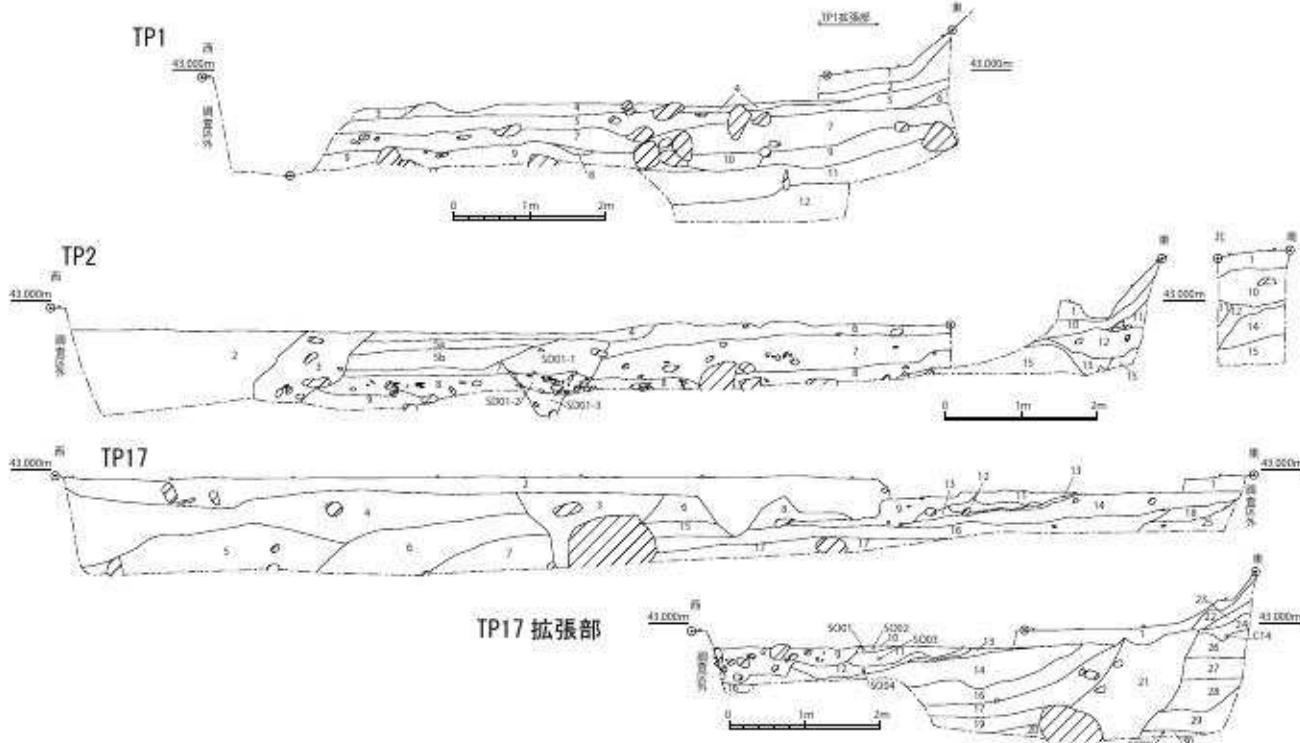


図4 TP1・TP2・TP17 土層断面図 (S=1/100)

5. 調査の概要

検出した遺構総数は9基で、溝状遺構(SD)1基、焼土を伴う遺構(SL)7基、土坑(SK)1基である。これらのうち当遺跡の特色といえるものは、調査区内に点在する焼土を伴う遺構であり、どれも被熱の度合いが弱い。

遺物は、表土や造成土である1～4層から弥生土器片や土師器片がコンテナ1箱分出土している。遺物包含層である6～8層においては、コンテナ約30箱分の遺物が出土しており、その大半は弥生時代中期土器であるが、古墳時代後期の須恵器や土師器も一定数みられるため、古墳時代の層であると判断した。

現場も中盤にさしかかった8月4日(土)には、地域住民をはじめとした一般向けに、現地説明会を実施した。当日は強い夏の日差しが照りつける中38名の参加があった。発掘体験を告知していたため、親子連れでの参加が多く見られた。なお、報道関係者として西海テレビ株式会社と長崎新聞社が取材に訪れた。



図5 発掘体験実施状況

6. 整理作業・報告書作成

平成30年11月から翌年3月にかけて、埋蔵文化財センターにおいて報告書作成に向けた整理作業を実施した。臨時作業員を雇用し、遺物の水洗、接合、実測、ID番号付与、デジタルトレースを行った。整理作業終了後、出土遺物は長崎県埋蔵文化財センター内の収蔵庫にて保管している。

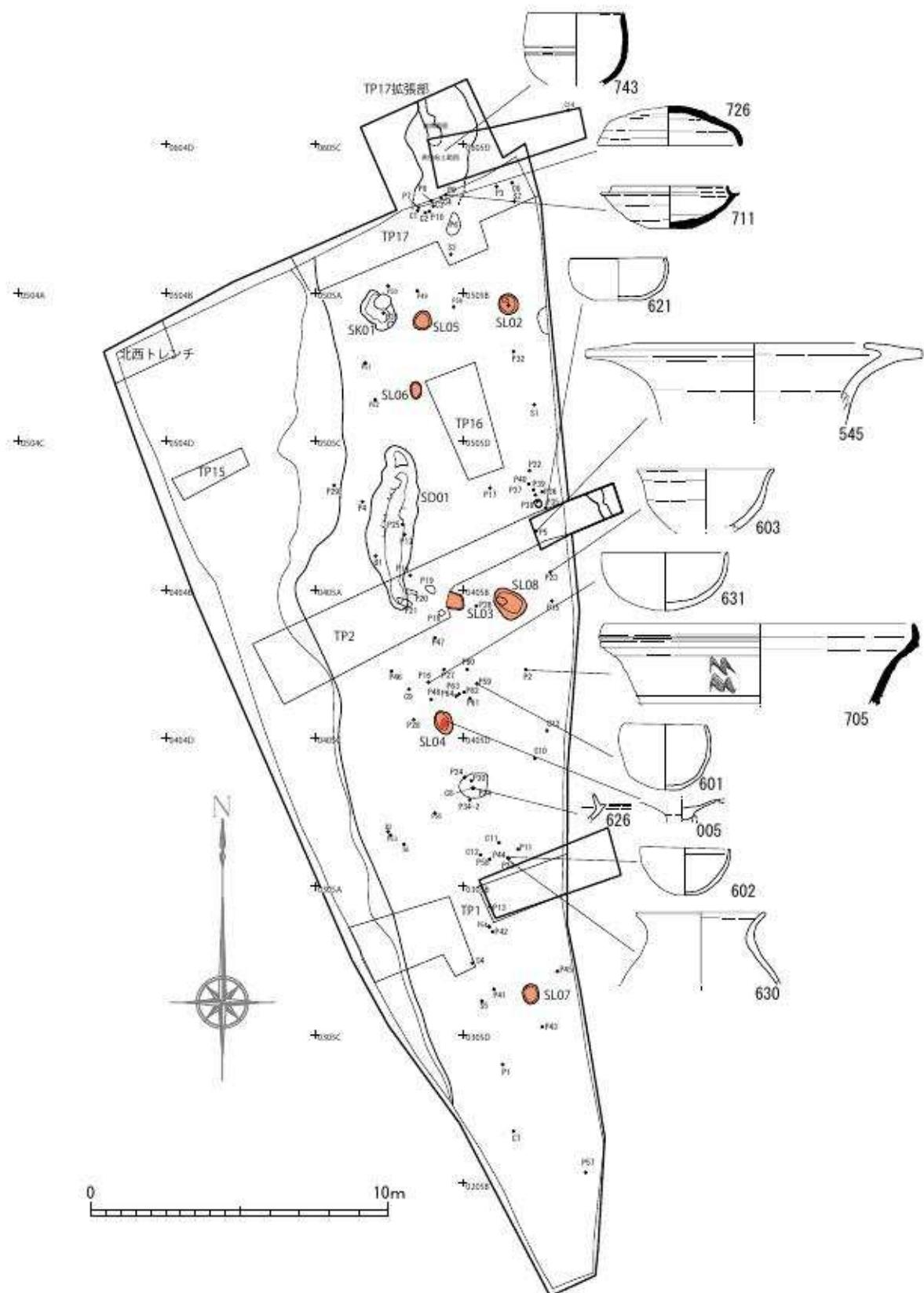


図6 遺構・遺物分布図 (S=1/200)

IV. 縄文時代の遺物

各包含層より出土した石器の大半は、縄文時代後期～晩期のものとみられる。太田遺跡は、周辺遺跡の項で述べたように良質な黒曜石や安山岩の産出地に近い立地であるが、当遺跡において出土した石器は、玄武岩製のものも多く確認できる。

801～806、831はスクレイパーである。このうち801および803の2点は縄文時代草創期末に製作されたとみられる円刃搔器で一部に礫面を残す。802は刃部の整形が弱い。831は良質な腰岳系黒曜石を素材としており、それ以外については比較的質のよい玄武岩を素材としている。828および829は黒曜石製の石匙である。どちらも縦長剥片を素材とし、両側面に押圧剥離を行い器形を作り出している。828は淀姫系黒曜石を使用して製作しているが、829については石材の产地は不明である。830は腰岳系黒曜石製の石器で、両側刃に上下逆方向の彫刀面が認められるので彫器と思われる。832は腰岳系黒曜石製の剥片鎌である。幅広の凹基を持ち、基部の抉り入りは明瞭である。先端から右側刃は欠損している。左側刃には鋸歯状の丁寧な調整剥離が入る。やや湾曲する。833および834は腰岳系黒曜石製の剥片である。833は側刃を研磨した痕跡がみられる。834は幅広の剥片で、被熱している。背面に加工痕がみられるため、加工痕のある剥片としたい。843は磨石として利用されたとみられる円礫であるが、自然石の可能性もある。844は蛇紋岩製の磨製石斧である。縄文時代前期頃に使用されていた扁平な両刃石斧とみられる。基部が欠損している。

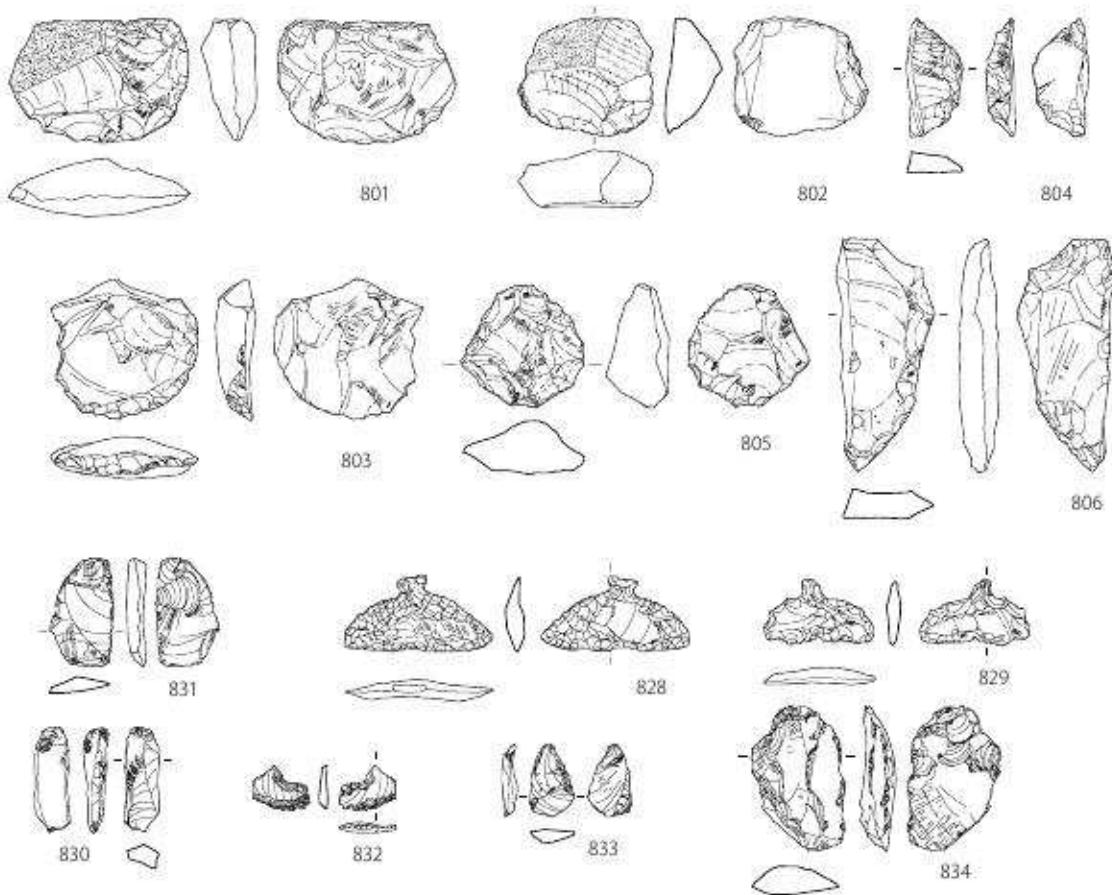


図7 縄文時代石器実測図 (S=1/3)



図8 縄文時代石器実測図 (S=1/3)

V. 弥生時代の遺物

包含層や後世の遺構より、多くの弥生土器片が出土している。いずれの遺物も弥生時代中期中頃から中期後半にかけての時期におさまる。008、069、092、520、は甕である。008は口縁部が外面に大きく突出し、頸部に突帯が一条巡る。074、217、489、536～539、545は壺である。出土数は少ないが、217のように袋状口縁を呈するものも確認された。また、538や489、539のように口縁端部や頸部に／状や×状の刻み目が確認できるものも少数出土した。537は底部である。底部中心より約1cmの場所に外面から内面に向かって開けられた穿孔が確認できる。545は鋤先口縁を呈し、内面・外面ともに丹塗りが施されている。224、380は壺ないし甕である。224は口縁端部に／状の刻み目が確認できるが、他の類似した刻み目がある土器に比べて薄手である。また、108、137、218、484、491、500などの分厚い甕棺の破片も出土した。484のように外面に円形の突起が確認できるものや、137、491、500のように口縁端部に／状の刻み目が確認できるものが確認された。179、241は器台である。241は脚部とみられ、外面に二条の突帯が巡る。各突帯の中央部には深さ約0.5mmの溝がみられる。また、005、483、485、486、579などの高坏の破片も数点みられた。

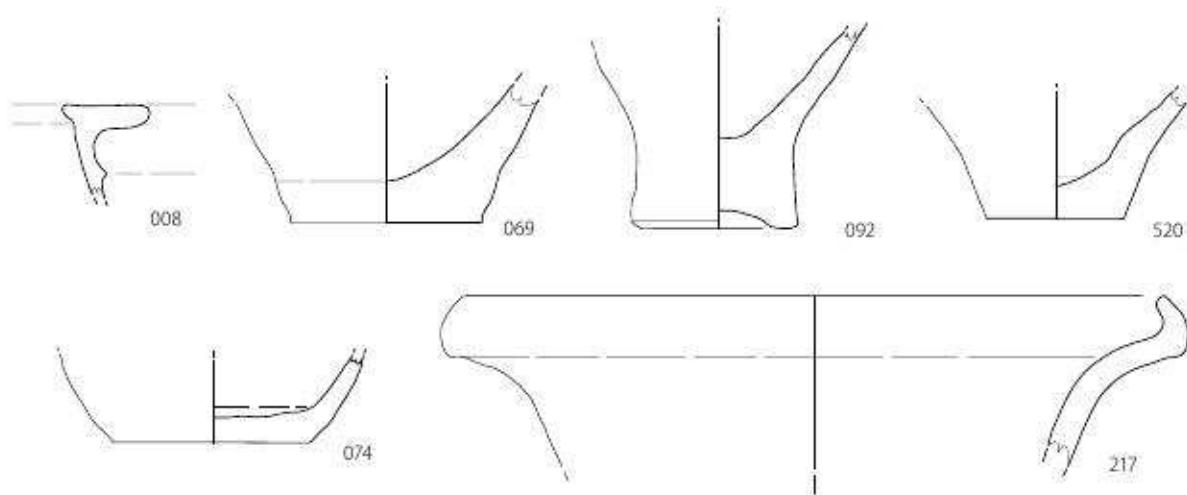
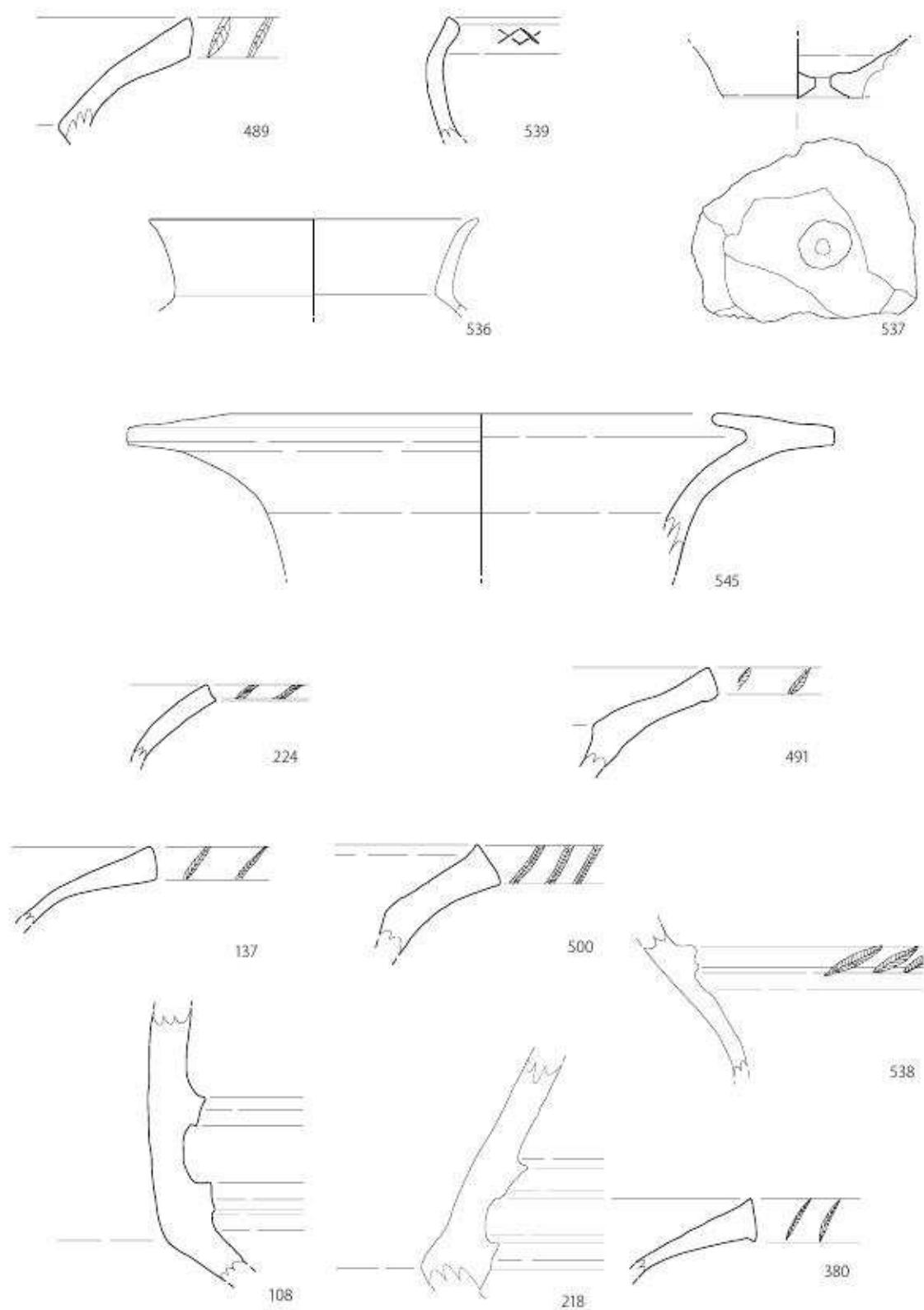


図9 弥生土器実測図 (S=1/3)

図 10 弥生土器実測図 ($S=1/3$)

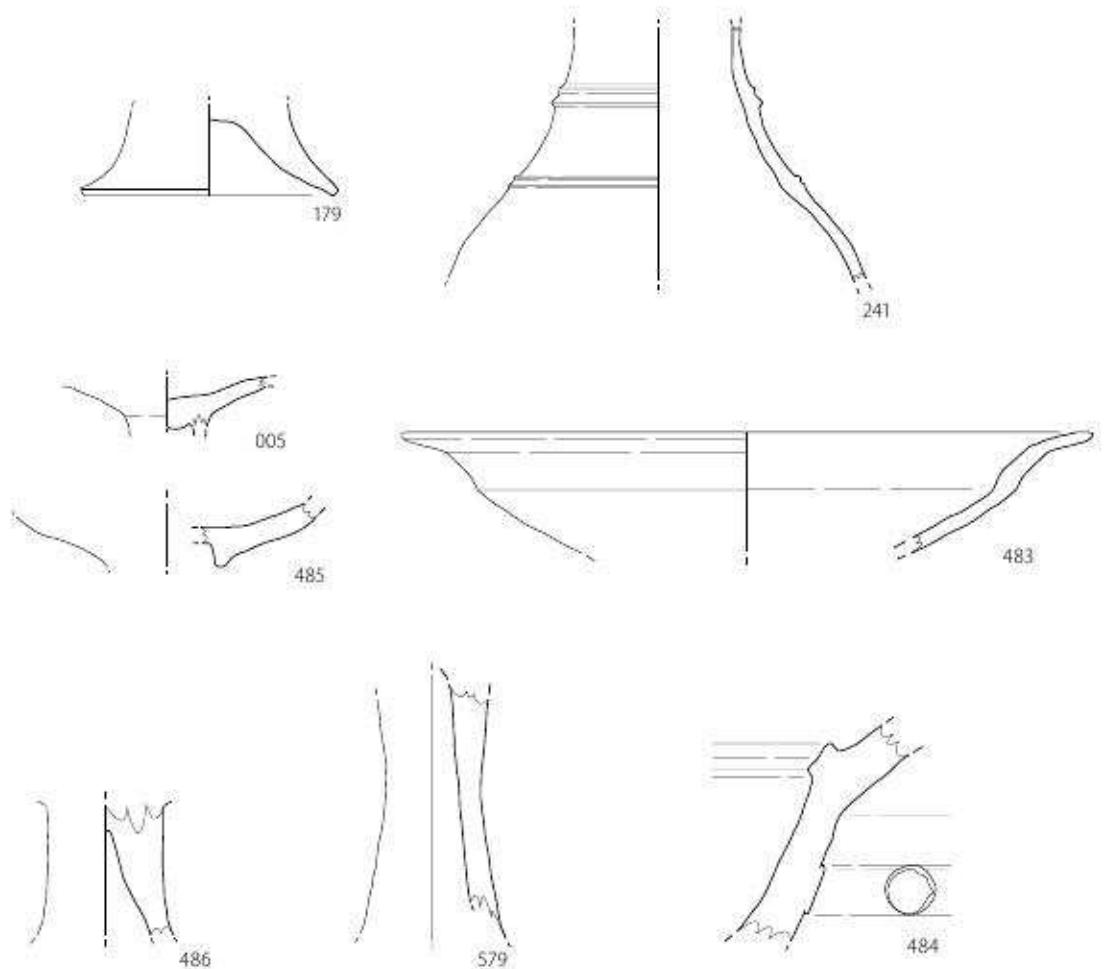


図11 弥生土器実測図 (S=1/3)

0 10cm

VI. 古墳時代の遺構と遺物

1. 遺構

(1) 焼土を伴う遺構 (SL2 ~ 8)

確認された焼土を伴う遺構について共通の特徴としてあげられるのは、被熱面が認識できない点である。土層中にまばらに焼土が確認できる程度で、小規模かつ恒常的な火處ではないことが想定できる。

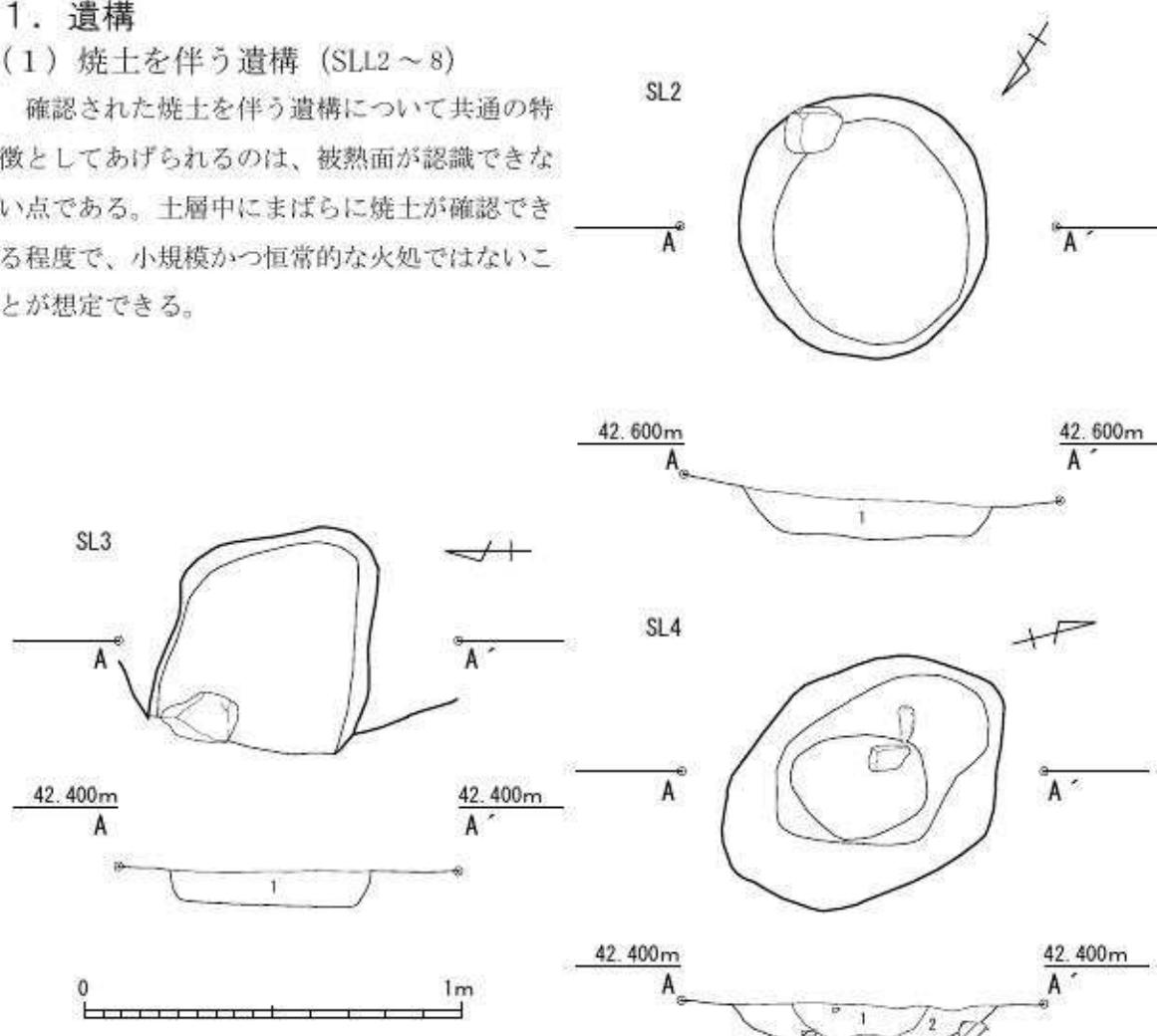


図 12 SL2・SL3・SL4 実測図 (S=1/20)

表 2 SL一覧

番号	グリッド	層位	法量(cm)			プラン	焼土状況	遺物
			長軸	短軸	深さ			
SL2	0505B	7層	70	66	14	円形	1cm長以下の赤色(10YR3/4) ブロックを1~2割含む。一般的な焼土よりも鮮やかな色味。	弥生土器片
SL3	0405A	7層	-	56	10	楕円形	3cm長以下の赤褐色(2.5YR4/6) の焼土ブロックを2割含む。	弥生土器片(須恵I式)
SL4	0405A	7層	85	61	12	楕円形	遺構中心から約35cm×約27cmの範囲に暗赤褐色(2.5YR3/6) の強い被熱を受けた焼土が確認できる。	弥生土器片・高杯片・土師器片
SL5	0505A	7層	67	64	15	円形	暗赤褐色(5YR3/4) の被熱範囲がみられ、遺構中心部には赤褐色(5YR4/8) の特に強い被熱箇所が確認できる。	弥生土器片
SL6	0505A	7層	68	37	10	楕円形	暗赤褐色(5YR3/4) の弱い被熱範囲が確認できる。	壺底部(平底)
SL7	0305B	8層	68	54	11	不定形	10cm長以下の赤褐色(5YR4/6) 焼土ブロックを1~2割含む。焼土ブロックには被熱による赤化がみられる。焼土面が形成された後、攪拌を受けブロック化した可能性がある。	弥生土器片
SL8	0405B	8層	118	93	18	不定形	遺構中心部に赤褐色(5YR4/6) の被熱の強い部分が確認できる。	弥生土器片

* SL3 の長軸については、TP2 の拡張範囲と重なっていたため、遺構西部が削れてしまい不明。

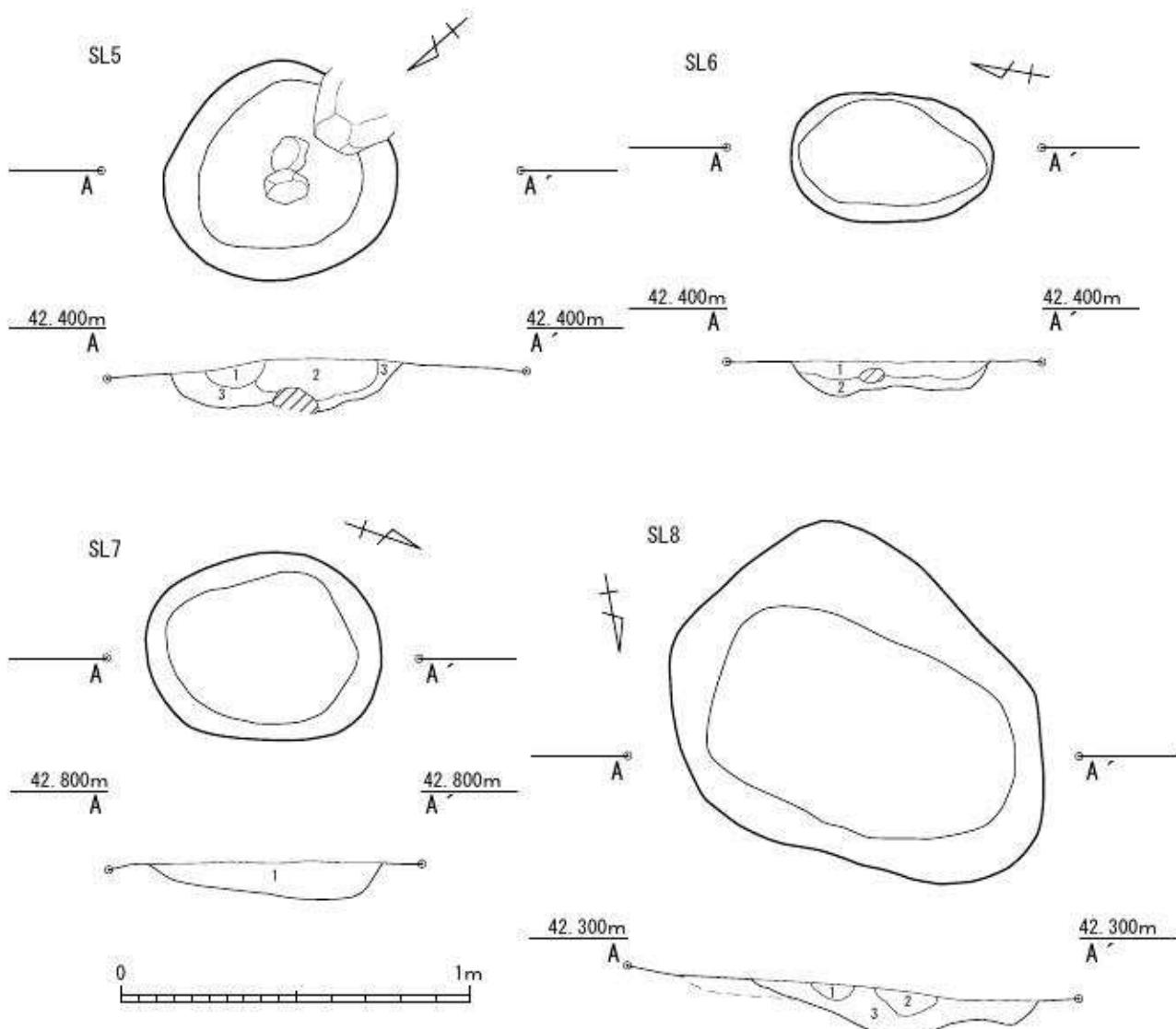


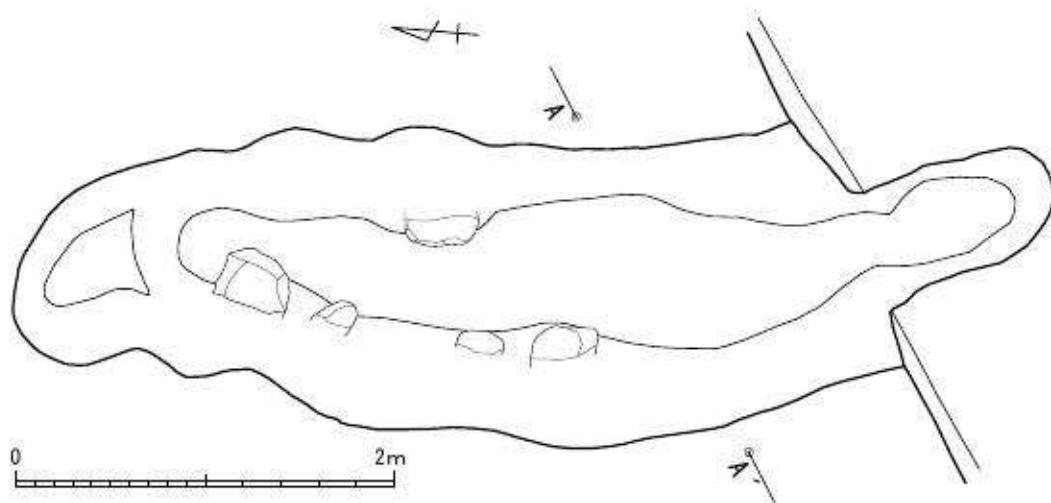
図 13 SL5・SL6・SL7・SL8 実測図 (S=1/20)

(2) 溝状遺構 (SD1)

北区 0505C ~ 0405A で 6 層検出時に確認された。規模は長軸 554cm、短軸 160cm、深さ 119cm を測る。上層・下層・最下層の 3 層に分層でき、下層下部には大量の礫の堆積が確認された。このことから、溝の埋没時期については、最下層の時期とそれより上の層の時期の 2 時期あることが推定される。

下層からは比較的多くの遺物が出土しており、壺・甕の破片の他に、須恵器壺蓋や玄武岩製のスクレイパー、甕棺の破片などが出されている。この中で、出土した甕棺の破片については、口縁部端に多くの字型の刻み目が複数施されている。最下層については、遺物は数える程しか出土していないが、鋤先口縁をもつ小片と平底壺の底部が確認された。

SD1 の掘削時期については、TP2 北壁土層より、旧表土や 5 層よりも古く 6 層よりも新しいことが確認できる。上層および下層については、土層観察と出土須恵器より、古墳時代中期以後に形成されたと考えられる。水はけが悪く、最下層はグライ化している。7 層および 8 層との層境では非常に強



い鉄分・マンガンの沈着がみられた。時期が特定できる遺物は確認できなかった。

(3) 土坑 (SK1)

北区 0505A で 8 層検出面にて確認された。平面プランは不定形で、長軸 144cm、短軸 105cm、深さ 48cm を測る。1 層からは平底の甕片が出土しているが、その他の出土遺物はどれも小片であり、時期の推定には使用できない。

2. 遺物

(1) 土師器

中区 04045D で 7 層調査時に壺 680 と塊 602、壺上半部 630 がまとまって出土した。

601、602、621、622、631、655、682、683 は塊である。601、602 は口縁部が内湾する。621 は口縁端部にヘラケズリの痕跡がみられる。外面底部には強い焦げ付きがみられ、内面にはスヌの付着がみられる。622 は外面に丹塗りの痕跡がみられる。683 は内面・外面ともに丹塗りが施されている。603 は鉢である。口縁部が外反する。624、626 は模倣坏とみ

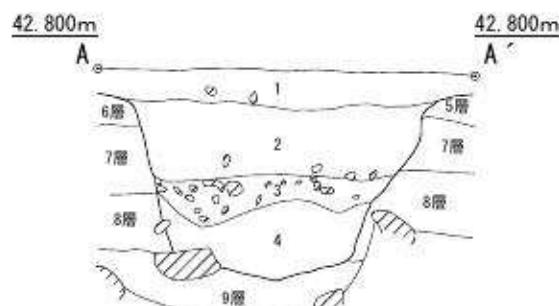


図 14 SD1 実測図 (S=1/40)

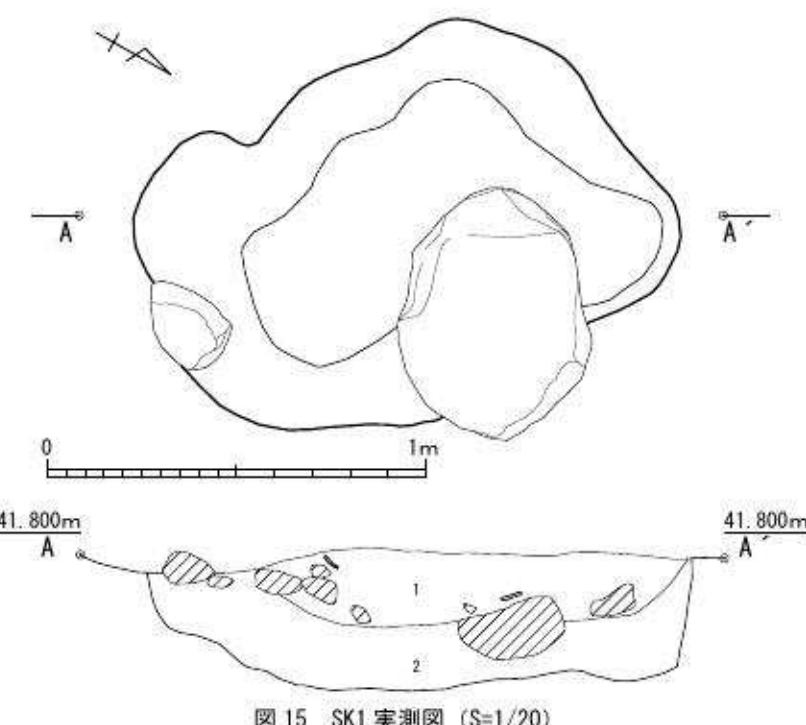


図 15 SK1 実測図 (S=1/20)

られ、それぞれ壺蓋・壺身を模したものだと思われる。629、638は小型丸底壺である。638は胴部で、内面にすすぐが付着している。628、630、654、672は壺である。674は高壺の脚部である。676、677は瓶である。676は底部に5つの穿孔が確認できる。

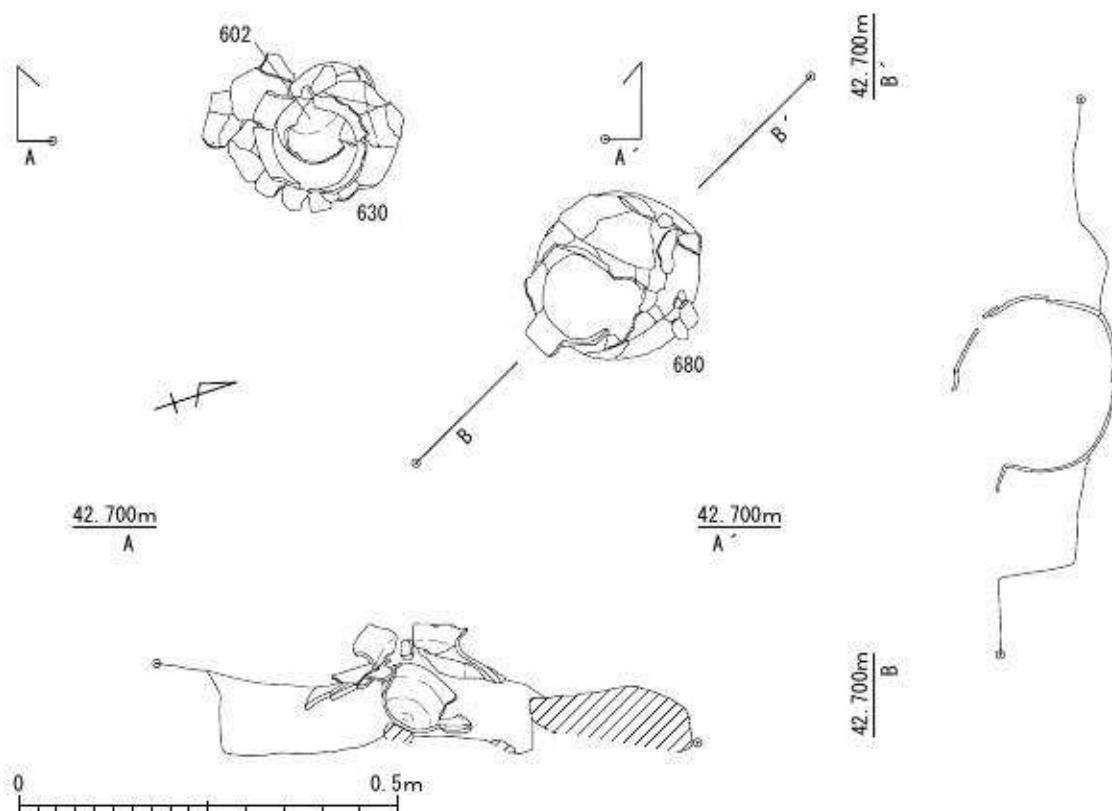


図 16 土師器 602、630、680 出土状況実測図 (S=1/10)

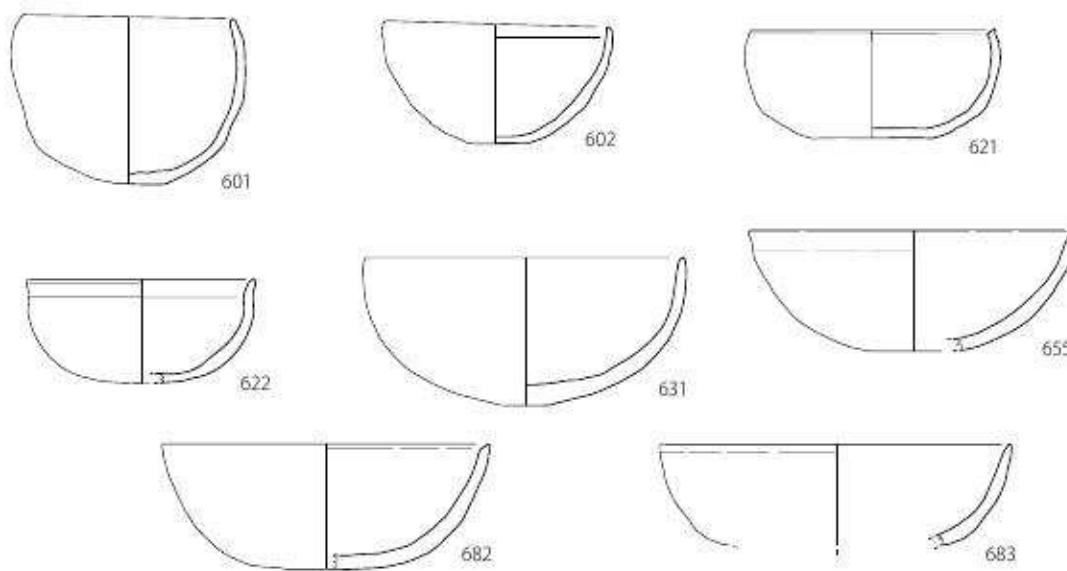


図 17 土師器実測図 (S=1/3)

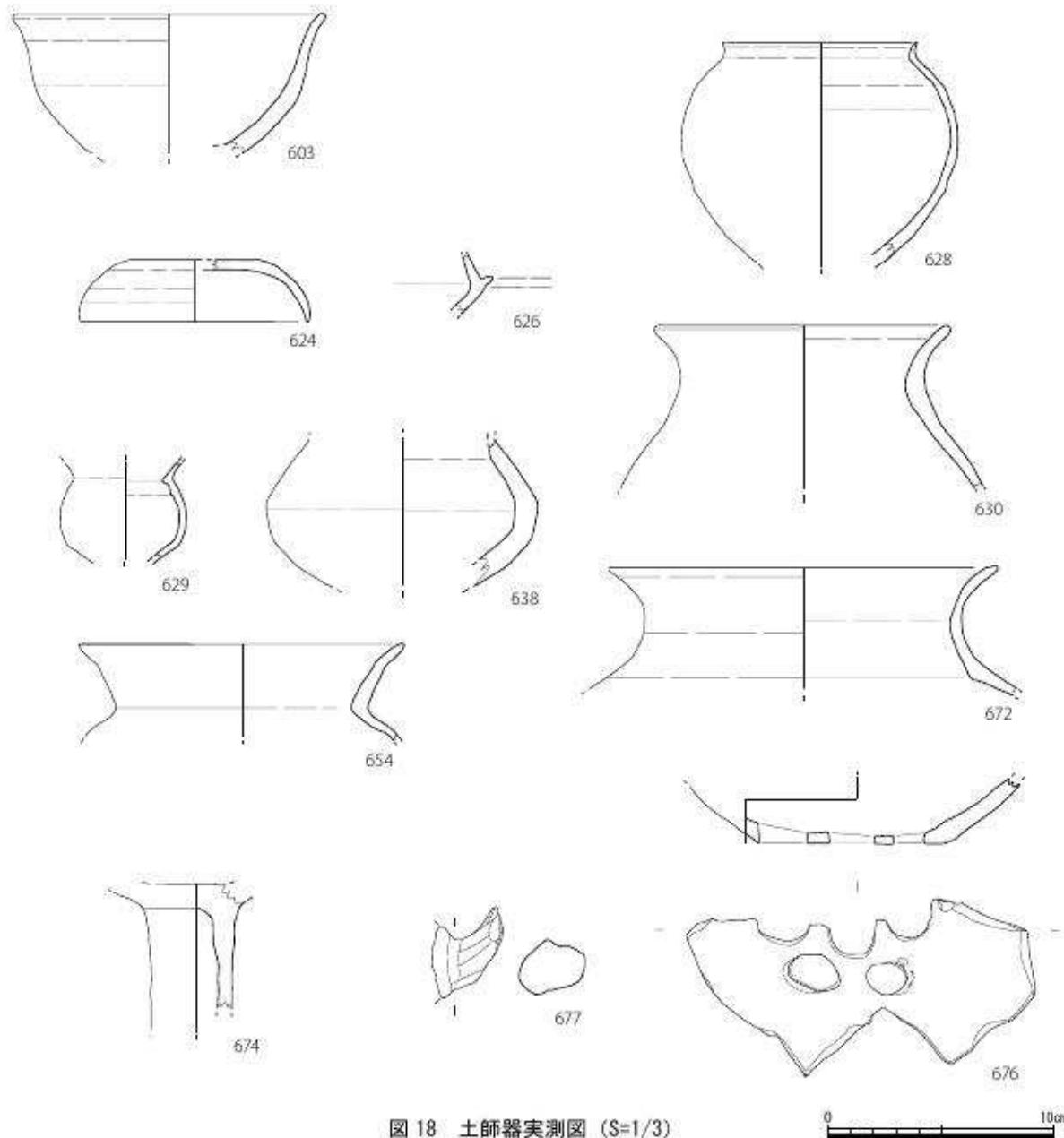


図 18 土師器実測図 (S=1/3)

0 10cm

(2) 須恵器

701 は壺の底部である。内面には当て具痕が、外面には格子状叩き目が確認できる。705 は甕の口縁部である。外面に櫛描波状文が 2 段確認できる。710 ~ 712、714、725、726、738、740、741 は蓋坏で、うち 710 ~ 712、714、741 が坏身、725、726、738、740 が坏蓋である。738 は内面に自然釉がかかっており、外面に 1 段の櫛描波状文と紐痕が確認できる。740 は内面・外面ともに自然釉がかかっており、口縁端部が舌状になりながらゆるやかに外反する。また、外面上部に若干の反り返りがみられるため、紐がついていたと思われる。738、740 はどちらも 6 世紀前半のものとみられる。710 ~ 712、714、725、741 については、概ねどの遺物も古墳時代後期の様相を示すが、726 に関しては後期から終末期にかけてのものと考えられる。743 は銅碗模倣品の口縁部である。6 世紀後半～末頃のものとみられ、最大径である胴部には二条の沈線が確認できる。749 は器台の脚部である。

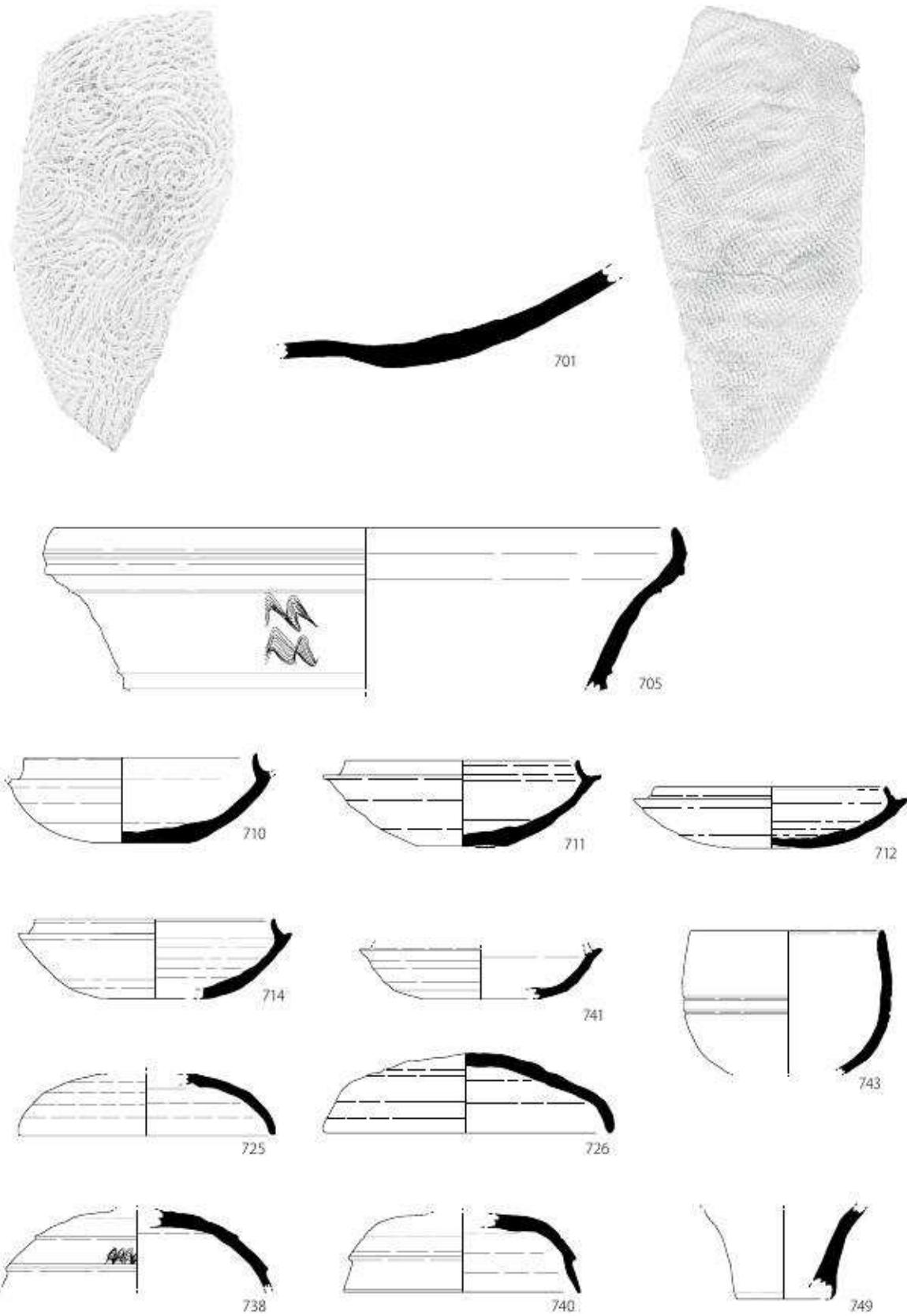


図 19 須恵器実測図 ($S=1/3$)

VII. その他の遺物

841、842は用途不明石製品である。841は弥生時代の石包丁の可能性があるが、大きく欠損しており全体形状は不明である。842は一部に研磨らしき痕跡が確認できる。磨製石器を作ろうとした意図で磨いたものではないと思われる。何らかの石器の製作途中の可能性もある。675は皿の底部である。内側が黒く高台の内側がややなだらかである。845は中世の滑石製石鍋の補修材である。中央には釘を通すための穴の跡がみられる。901は青磁碗の口縁部である。外面に鎬連弁文が確認できる。902は白磁皿の口縁部である。903は白磁蓋の口縁部である。

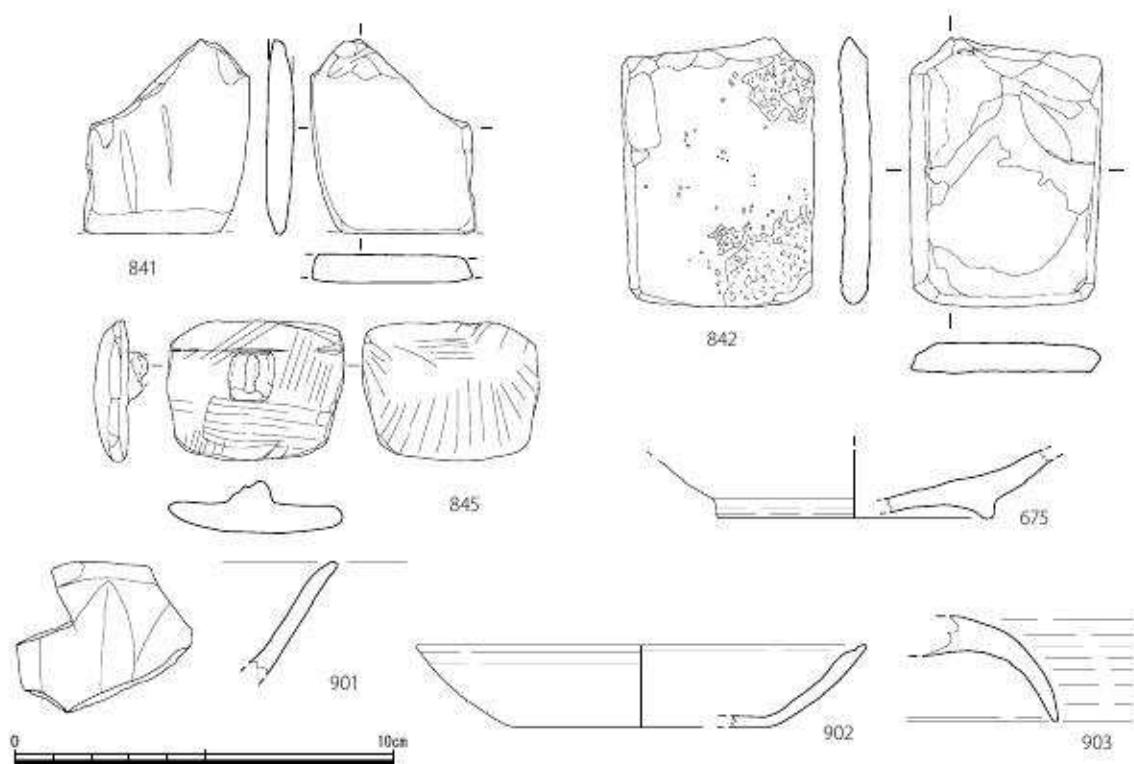


図20 用途不明石製品・黑色土器・石鍋補修材・貿易陶磁器実測図 (S=1/2)

表3 弥生土器一覧

ID	出土位置		種別 器種 型式・時期	部位	法量(cm)				調整ほか特徴	色調 上段:外面 下段:内面	備考
	遺構等	層位			器高	口径	脚径	底径			
005 SL4	弥生 墓	底部	(2.0)	—	—	—	—	外・内】テ	褐色5YR7/8 褐色7.5YR7/6		
008 SL7	弥生 墓 頭丘I	口縁部	(3.6)	—	—	—	—	外】テ、突帯1条 内】テ	浅黄色2.5Y7/4 浅黄色2.5Y7/4		
069 TP1	弥生 墓	底部	(5.5)	—	—	(7.6)	外】テハヤ 内】テ	明褐色7.5YR5/6 褐色2.5YR6/6	平底		
074 0305B	弥生 墓	底部	(3.4)	—	—	(8.0)	外・内】テ	褐色5YR6/6 明赤褐色5YR6/6	平底		
092 P67 0305D	弥生 墓	底部	(8.0)	—	—	6.7	外】テハヤ 内】テ	オリーブ黒色5YR3/1 浅黄褐色7.5YR8/6			
P47 0405A	弥生 墓	口縁部	(13.1)	—	—	—	外】テハヤ、突帯2条 内】コハヤ	黄褐色2.5YR5/4 黄褐色2.5YR5/6			
137 0405A	8層 弥生 墓棺?	口縁部	(3.8)	—	—	—	外】口縁端面に「狀の刻み目	褐色7.5YR7/8 褐色7.5YR7/6			
179 0405A	8層 弥生 器台	脚部	(3.4)	—	—	9.6	外】テ	褐色7.5YR6/8 褐色7.5YR7/6			
P26 217 0405B	弥生 墓	口縁部	(6.9)	28.0	—	—	外・内】テ	要状口縁	にぶい黄褐色10YR6/4 浅黄褐色10YR8/4		
218 P60 0405B	弥生 墓棺	頭部	(11.4)	—	—	—	外】テハヤ、突帯2条 内】コハヤ	にぶい黄褐色10YR7/3 にぶい黄褐色10YR7/3			
224 0405B	6層表土直 弥生 墓	口縁部	(4.0)	—	—	—	外】口縁端面に「狀の刻み目	明赤褐色SYR5/8 明赤褐色SYR5/8			
241 0405B	7層 弥生 器台	—	(10.1)	—	—	—	外】コハヤ、外腹片壊り、突帯3 条 内】テハヤ	褐色7.5YR6/6 にぶい黄褐色10YR6/4			
380 0405A	8層 弥生 墓	口縁部	(3.8)	—	—	—	外】口縁端面に「狀の刻み目	浅黄褐色7.5YR8/6 にぶい黄褐色10YR7/4			
483 0505A	8層 弥生 墓・壺	口縁部	(4.8)	(27.4)	—	—	—	—	褐色2.5YR6/6 明褐色7.5YR5/6		
484 0505A	8層 弥生 墓棺	頭部	(8.8)	—	—	—	外】突起 内】突帯1条	にぶい黄褐色10YR7/4 にぶい褐色7.5YR7/4			
485 0505A	8層 弥生 高杯	底部	(2.5)	—	—	—	—	—	浅黄褐色7.5YR8/4 浅黄褐色7.5YR8/4		
486 0505A	8層 弥生 高杯	脚部	(5.2)	—	—	—	—	—	褐色7.5YR6/6 褐色7.5YR6/6		
489 0505A	8層 弥生 墓	口縁部	(5.9)	—	—	—	外】口縁端面に「狀の刻み目	褐色SYR6/8 褐色SYR6/8			
491 0505A	8層 弥生 墓棺?	口縁部	(4.9)	—	—	—	外】口縁端面に「狀の刻み目	にぶい褐色7.5YR7/4 浅黄褐色7.5YR8/4			
500 0505B	6層 弥生 墓棺	口縁部	(5.4)	—	—	—	外】口縁端面に「狀の刻み目	褐色7.5YR6/6 黄褐色7.5YR7/8			
520 P4 4050C	弥生 墓	底部	(5.1)	—	—	(5.4)	—	—	褐色7.5YR7/6 黒褐色10YR3/1	平底	
536 0505C	8層 弥生 墓	口縁部	(5.4)	(18.6)	—	—	外】ハケ 内】テ	褐色7.5YR6/8 褐色7.5YR6/6			
537 0505C	8層 弥生 墓	底部	(2.8)	—	—	—	外】底部に外面から内面に向け た穿孔	褐色SYR6/8 褐色SYR6/8	平底		
538 0505C	8層 弥生 墓	頭部	(7.4)	—	—	—	外】頭部に突帯1条、突帯に/ 狀の刻み目	浅黄褐色10YR8/3 浅黄褐色10YR8/3			
539 0505C	8層 弥生 墓	口縁部	(5.7)	—	—	—	外】頭部～口縁部に突帯1条、 突帯にX状の刻み目	明褐色10YR7/6 浅黄褐色7.5YR8/6			
545 P5 0505D	弥生 墓 頭丘II	口縁部	(7.8)	(22.4)	—	—	外】ハケ、月窓り 内】升窓り	明赤褐色SYR5/6 明赤褐色SYR5/6			
P10 0605C	弥生 高杯	脚部	(15.0)	—	—	—	外】テ	褐色5YR7/6 褐色5YR7/6			

表4 土師器一覧

ID	出土位置		種別 器種 型式・時期	部位	法量(cm)				調整ほか特徴	色調 上段:外面 下段:内面	備考
	遺構等	層位			器高	口径	脚径	底径			
601 P59 0405B	土師器 壺	—	—	—	8.7	10.7	12.0	2.3	外・内】テのちハヤ 口縁部内 湾	褐色5YR6/8 褐色5YR6/8	
602 P44 0405D	土師器 壺	—	—	—	6.5	11.8	12.2	2.9	外・内】テ 口縁部内湾	褐色5YR6/8 褐色5YR6/8	
603 P23 0505D	土師器 鉢	—	—	—	(6.2)	(13.6)	—	—	外・内】テ 口縁部外反	褐色7.5YR7/6 褐色7.5YR7/6	
621 P25 0505D	土師器 壺	口縁部	5.5	(12.4)	(13.0)	(6.0)	外】コハヤ、寸付着 内】テ 口縁部内ラブリ	褐色SYR6/6 黄褐色7.5YR8/8			
622 0405AB	6層 土師器 壺	口縁部	5.5	(12.0)	—	—	外】テハヤ、月窓り 内】テ 透部～3調整	褐色7.5YR7/6 にぶい黄褐色10YR7/4			
624 0405A	8層 土師器 壺	口縁部	3.7	(13.6)	—	—	外・内】テ	浅黄褐色7.5YR8/6 褐色7.5YR7/6			
626 P24 0405D	土師器 壺	受け部	(2.4)	—	—	—	外・内】コハヤ	浅黄褐色7.5YR8/6 浅黄褐色7.5YR8/6			
628 0405B	6層 土師器 壺	—	(12.0)	(10.2)	(14.8)	—	外・内】テ	褐色7.5YR7/6 浅黄褐色7.5YR8/6			

表5 土師器・須恵器・貿易陶磁器一覧

ID	出土位置		種別 器種・時期	部位	法量(cm)				調整ほか特徴	色調 上段: 外面 下段: 内面	備考
	遺構等	層位			基高	口径	胸径	底径			
629 0505C	8層	土師器 小空壺			(6.1)	—	(7.8)	—	外】タテハゲ、ヨコハゲ	褐色7.5VR7/6 褐色7.5VR7/6	
630 P33 0405D	7層	土師器 壺	口縁部	(7.2)	(13.0)	—	—	—	外・内】テテ	明黄褐色10YR7/6 淡黄褐色10YR8/4	境802の上に後せられる ように出土
631 P16 0405A	6層	土師器 壺			5.9	(12.5)	(12.8)	—	外】テテ、底部にすす付着 内】 ナフ	褐色5YR6/6 褐色7.5NR6/6	
638 0405A	8層	土師器 小空壺	肩部	(6.6)	—	(12.0)	—	—	外】テテ 内】テテ、すす付着	褐色5YR7/6 褐色5YR7/8	
654 0505C	8層	土師器 壺	口縁部	(5.4)	(18.2)	—	—	—	外】ハゲ、口縁部ヒオヰエ 内】 テ	褐色5YR6/6 黄褐色7.5VR7/8	
655 0405A	8層	土師器 壺	口縁部～底部	4.8	(13.0)	—	—	—	外】テテ 内】テテ、口縁端部ヘテ タスリ	褐色5YR7/6 黄褐色7.5VR7/8	
672 P39 0505D	土師器 壺	口縁部	(5.7)	(17.2)	—	—	—	—	外・内】テテ	褐色7.5VR7/6 黄褐色7.5VR7/8	
TP2											
674 0405A05 05CD	7層	土師器 高杯	脚部	(6.6)	—	—	—	—	外】タテハゲ	褐色7.5VR6/8 褐色7.5VR6/8	
675 0505A	6層下面	土師器 甌 黑色土器 九州Ⅱ類III 期	底部	(1.8)	—	—	—	—	外・内】テテ	黄褐色10YR8/6 黒褐色10YR1/1	高古寒社
676 0505C	8層	土師器 甌	底部	(2.9)	—	—	—	—	外】タテハゲ、底部にすす付着、 底部に外面から内面に向いた 穿孔孔? 内】すす付着	黄褐色7.5VR7/8 絆黒色7.5GY2/1	
677 TP17 0605CD	7層	土師器 甌	底子	(3.9)	—	—	—	—	—	—	にぶい黄褐色10YR7/3
682 0405A	8層	土師器 壺	口縁部	5.0	(12.0)	—	—	—	外・内】テテ	明黄褐色10YR6/8 にぶい褐色5YR7/6	
683 0405D	8層	土師器 壺	口縁部	(4.0)	(14.0)	—	—	—	外・内】テテ。内側引	褐色5YR6/6 褐色5YR6/6	
701 P6 0605C	須恵器 甌	底部	(5.0)	—	—	—	—	—	外】格子状明き日 内】當て具 直	褐色5YR6/6 にぶい褐色7.5YR6/4	
705 P2	6層	須恵器 甌	口縁部	(8.1)	(31.2)	—	—	—	外】ヨコハゲ、櫛梳波状文2段 内】ヨコハゲ	暗青灰色5PB4/1 青灰色5PD6/1	
710 P29 0605C	須恵器 环身 古墳時代後 期			4.5	11.6	—	4.4	外】ヘタケツリテテ 内】ヨコハゲ	暗青灰色5B7/1 青灰5B6/1~5/1		
711 P9	8層上面	須恵器 环身 古墳時代後 期		4.4	(11.6)	(14.0)	(4.4)	外】ヨコハゲ、底部ヘタケツリ 内】 コナフ	褐灰色10YR4/1 褐灰色10YR4/1		
712 0605CD	8層	須恵器 环身 古墳時代後 期		3.1	(11.6)	(13.8)	(4.2)	外】ヨコハゲ、底部ヘタケツリ 内】 コナフ	灰色N7/0~5/0 灰色N7/0~6/0		
714 0405D	6層	須恵器 环身 古墳時代後 期		4.0	(12.0)	(13.8)	(5.6)	外・内】ヨコハゲ	黄灰色2.5Y6/1 灰黄色2.5Y7/2		
725 0605C	7層	須恵器 环身 古墳時代後 期		(3.1)	(12.8)	—	—	外】ヨコハゲ 内】ヨコハゲ、口 縁端部ヘタケツリのちナフ	青灰5PB6/1 青灰色5PD6/1		
726 P7_P8 0605C	8層上面	須恵器 环身 吉墳時代後 期～終末期		4.0	14.4	—	—	外】ヘタケツリナフナフ、回転ナフ 内】ヨコハゲ	青灰5PB5/1 青灰色5PD5/1	TK209に近い	
738 0505C	8層	須恵器 环身 6世紀代		(3.9)	—	—	—	外】ヨコハゲ、櫛梳波状文、粗底あ り 内】ナフ、自然釉	暗青灰色5PB6/1 青灰色5PD6/1		
740 0405ABC_5b層		須恵器 环身 6世紀代		(4.0)	(11.8)	—	—	外】自然釉、粗底 内】自然釉	にぶい褐色2.5Y6/4 暗灰黄色2.5Y5/2		
741 SD1 0505C	下層	須恵器 环身		(2.5)	—	—	—	—	—	灰黄色2.5Y7/2 灰黄色2.5Y7/2	焼けが悪い
743 TP17松葉 瓶		須恵器 銅鏡模倣		(7.2)	(9.6)	(10.6)	—	外】ハゲ、腹部に沈継2条 内】ハ テテ 口縁端部にヘタケツリのちナフ	灰色10Y6/1 灰色10Y6/1		
749 0505C	6層	須恵器 器合?	脚部	(4.6)	—	—	(5.0)	外】ヨコハゲ 内】ナフ	灰黄色2.5Y7/2 灰黄色2.5Y7/2		
901 05 0605C	表土直下～青磁 0405B	口縁部	(3.0)	—	—	—	—	外・内】施釉、外面に錦菫弁文	灰オリーブ色7.5Y6/2 灰オリーブ色7.5Y6/2		
902 P46 0405A	8層	白磁	口縁部～底部	2.2	(12.0)	—	(7.0)	外・内】施釉、口縁端部粗利さ リ	灰色10Y7/1 灰色10Y7/1		
903 TP2	グライ層	白磁	蓋	(2.8)	—	—	—	外・内】施釉	灰白色5Y8/1 灰白色5Y8/1		

表6 石器一覧

ID	出土位置		器種	石材	法量(cm)				備考
	遺構等	層位			長さ	幅	厚み	重量	
801 0405D	8層		スクレイバー	玄武岩	5.0	7.2	2.2	74.0	作りが丁寧、円刀搔器
802 0305D	7層		スクレイバー	玄武岩	4.8	5.5	2.4	64.0	
803 0405D	6層		スクレイバー	玄武岩	5.6	5.6	1.6	52.0	作りが丁寧、円刀搔器
804 0405A	7層		スクレイバー	玄武岩	4.2	(2.3)	(1.0)	10.4	刃部の作りが丁寧
805 0405A	8層		スクレイバー	玄武岩	4.8	4.8	2.4	44.0	
806 0405D	8層		スクレイバー	玄武岩	9.2	3.6	1.6	53.5	サイドスクレイバー(削器)
828 S-2	6~8層		石匙	黒曜石(淀脛系)	3.0	5.9	0.8	6.2	
829 0505D	8層		石匙	黒曜石(上土井行?)	2.6	4.4	0.6	2.0	
830 0405D	礫層上面		彫器	黒曜石(腰岳系)	4.2	1.4	1.0	5.0	
831 0505B	7層		スクレイバー	黒曜石(腰岳系)	2.6	4.4	0.8	7.4	
832 S-1			剥片	黒曜石(腰岳系)	1.8	2.3	0.4	1.4	
833 0305D	10層上面		剥片	黒曜石	2.9	1.8	0.7	2.6	側辺を研磨している?
834 0405B	7層		剥片	黒曜石(腰岳系)	3.8	5.8	1.4	24.9	加工痕あり
841 0405C	8層		石包丁?	砂岩	5.2	4.5	0.7	27.1	磨製石包丁の可能性があるが、大きく欠損しており全体形状は不明。
842 S-6		用途不明未製品	砂質片岩		7.2	5.1	0.8	59.1	一部研磨らしき痕跡がみえるが他は違う。磨製石器を作ろうとした意図で磨いたものではないと思われる。何らかの石器の製作途中か。
843 0405D	6層		磨石	玄武岩	8.0	7.7	(6.4)	413.0	
844 表土			石斧	蛇紋岩	11.9	8.7	2.6	369.8	摩製、扁平な両刃石斧
845 TPI~2間 壁切・表土直下			石鍋補修財	滑石	3.8	4.7	1.4	27.8	鉤穴あり

VIII. 自然科学分析

1. 放射性炭素年代測定

太田遺跡の年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

長崎県松浦市御厨町寺ノ尾免に所在する太田遺跡は、竜尾川東岸の丘陵裾部に位置し、発掘調査では弥生時代・古墳時代に帰属する遺構・遺物が確認されている。

本分析調査では、遺構覆土中などから採取された炭化材について、放射性炭素年代測定を実施し、遺構等の年代に係る試料を得る。なお、状態が良好な炭化材試料については合わせて樹種同定を行い、同定結果を結果表に示した。

1. 試料

年代測定を行う試料は、表7に示す試料4点である。いずれの試料も、土壤に付着した炭化物である。自然乾燥させた後、土壤を削って、炭化物を抽出する。またこれらのうち、C1は状態が比較的良好な炭化材である。樹種同定を実施した結果、ツバキ属に同定された。その他の試料については、木材組織の観察が不可能であり、樹種同定を行うことができなかった。樹種同定の結果については表7に併せて記載する。

2. 分析方法

C1とC3に関しては塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、14Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からの差を千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、曆年較正用に一桁目まで表した値も記す。曆年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3(Bronk, 2009)、較正曲線はIntcal13(Reimer et al., 2013)である。

3. 結果

結果を表7に示す。C1は通常のAAA処理、C3はアルカリ濃度を薄くした（通常の一万分の一）処理、C5、So01は、試料が微量なためAAA処理を行わずに、処理を行う。同位体効果を考慮した測定値は、C1が $1,485 \pm 20$ BP、C3が $1,605 \pm 20$ BP、C5が $1,605 \pm 20$ BP、So01が $1,810 \pm 20$ BPである。

曆年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することによって、曆年代に近づける手法である。較正用データーセットは、Intcal13 (Reimer et al., 2013) を用いる。 2σ の値は、C1がcalAD545～630、C3がcalAD401～536、C5がcalAD401～536、So01がcalAD141～251である。

なお、本分析調査では状態の良いC1について樹種同定を行った結果、ツバキと同定された。以下にツバキの解剖学的特徴などを述べる。

- ・ツバキ属 (*Camellia*) ツバキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

ツバキ属は、本州・四国・九州・琉球の主として沿海地に自生する。ツバキ属には、ツバキと四国・九州・琉球の山地に自生するサザンカがあり、ともに多くの変・品種があり植栽される。ヤブツバキの材は重硬・強靭で割れにくく、加工はやや困難、耐朽性は高い。器具・旋作・機械・薪炭材などに用いられる。種子からは油が搾られ、頭髪・食用・機械・燈・薬などに利用される。またサポニン原料ともなり魚毒・農薬として用いられた。木灰は媒染剤ともなる。

4. 考察

本分析調査で対象とした試料のうち、C1、C3、C5はおよそ古墳時代後半頃の年代値を示し、特にC3とC5は測定値が同じであり、同時期に帰属する可能性が高い。So01は他の試料に比べて古い値を示し、弥生時代末から古墳時代初頭頃の年代観が考えられる。本分析調査の結果と共に、各遺構等から出土した土器の年代観や、遺構の切り合い関係、炭化材が採取された層準等の、発掘調査における所見を合わせて検討し、遺構および層位の年代について検討する必要がある。

表7 放射性炭素年代測定結果

試料	種別/ 性状	方法	補正年代 (曆年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代						Code No.
					年代値				確率%		
C1	炭化材 (ツバキ属)	AaA (0.0001N)	1485±20 (1483±20)	-26.17 ±0.27	σ cal AD 563 - cal AD 605	1388 - 1345 calBP	68.2		YU-	pal- 8938	11727
C3	炭化材 (微細片)	AaA (0.0001N)	1605±20 (1604±20)	-27.88 ±0.31	σ cal AD 411 - cal AD 432	1540 - 1518 calBP	24.4		YU-	pal- 8939	
					σ cal AD 490 - cal AD 532	1460 - 1419 calBP	43.8				11728
C5	炭化物 (微小)	無処理	1605±20 (1604±20)	-24.11 ±0.25	σ cal AD 401 - cal AD 475	1549 - 1476 calBP	47.5		YU-	pal- 8941	11730
					σ cal AD 484 - cal AD 536	1466 - 1415 calBP	47.9				
So01	炭化物 (微小)	無処理	1810±20 (1812±20)	-23.30 ±0.34	σ cal AD 141 - cal AD 158	1809 - 1793 calBP	12.5		YU-	pal- 8940	11729
					σ cal AD 167 - cal AD 196	1784 - 1755 calBP	24.3				
					σ cal AD 209 - cal AD 240	1742 - 1711 calBP	31.4				
					σ cal AD 131 - cal AD 251	1820 - 1699 calBP	95.4				

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲) を年代値に換算した値。

4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したこと。

5) AAA処理を行わずにグラファイト化したものは無処理と記載。

6) 曆年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。

7) 曆年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用。較正データーセットはIntCal13を使用。

8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

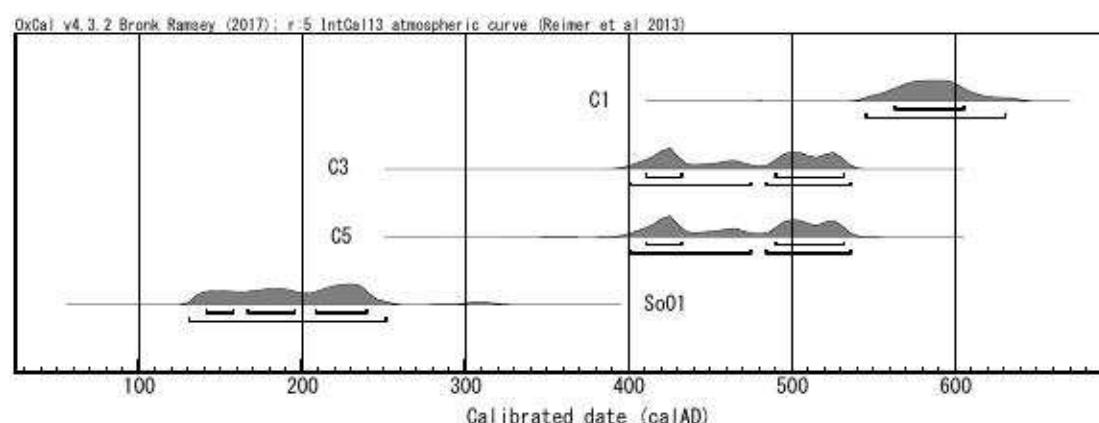
9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である。

図21 曆年較正結果

引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

2. 黒曜石产地推定

長崎県埋蔵文化財センター 片多 雅樹

長崎県埋蔵文化財センターでは、主に九州産黒曜石原石の分析データを蓄積し、遺跡出土黒曜石製品の産地推定を実施している。エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて、非破壊で定性分析を実施し、望月氏が考案した判別図法によって原産地を推定している。今回の調査では10点の黒曜石製石器が出土しており、分析を行った。装置の仕様及び分析条件は以下のとおり。

エネルギー分散型蛍光X線分析装置(SIIナノテクノロジー社製:SEA1200VX)。下面照射式で照射径は8mmΦ。Rh(ロジウム)管球、SDD検出器で液体窒素を要しない。分析条件は管電圧40kVで管電流は抵抗値によって自動設定とした。大気雰囲気で、測定時間100秒で分析を行った。

分析結果を表8に、判別図を図22に示す。分析の結果、石匙2点以外はすべて腰岳系（佐賀県伊万里市）であることが分かった。石匙は2点とも明らかに他資料とは石質が異なっており、いずれも灰色がかかった様相を呈していたが、分析の結果は2点とも異なる原産地を示した。石匙①(201802-828)は淀姫系（長崎県佐世保市）、石匙②(201802-829)は原産地不定としたが、上土井行（長崎県西海市）に近接していることが分かった。

表 8 黒曜石产地推定分析結果

計測ID	資料名	本基実測回	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn×100/Y	Sr分率	log Fe/Y	補定原产地
OTA201802-828	石鏡		63.04	25.95	860.97	217.35	192.83	97.61	355.93	25.16	3.01	22.33	1.13	足跡系
OTA201802-829	石鏡		39.63	44.76	785.48	149.34	383.06	84.59	238.71	17.49	5.70	44.87	1.29	不明(上土井行か)
OTA201802-830	霞晶		59.09	21.89	505.35	294.32	89.16	120.72	203.31	40.76	4.33	12.78	0.93	霞岳系
OTA201802-831	スカルペル?角巖		84.15	24.01	580.75	315.97	94.82	120.50	223.86	41.29	4.28	12.39	0.94	霞岳系
OTA201802-832	石鏡剥片		86.49	23.27	566.17	313.29	94.68	128.66	214.56	41.71	4.11	12.60	0.93	霞岳系
OTA201802-834	加工面のある剥片		67.25	25.44	630.10	313.66	95.01	129.50	217.56	41.51	4.04	12.57	0.97	霞岳系
OTA201802-837	根莖石器		63.72	21.01	555.53	301.19	91.54	125.56	204.49	41.67	3.94	12.66	0.94	霞岳系
OTA201802-838	スカルペル?		83.13	22.73	541.40	302.91	93.31	129.19	217.95	40.75	4.20	12.55	0.93	霞岳系
OTA201802-839	剥片		87.00	22.03	725.77	299.89	103.37	126.16	293.89	36.42	3.04	12.56	0.92	霞岳系
OTA201802-840	残核		65.49	22.38	553.11	303.86	96.23	130.28	219.25	40.54	4.05	12.84	0.93	霞岳系

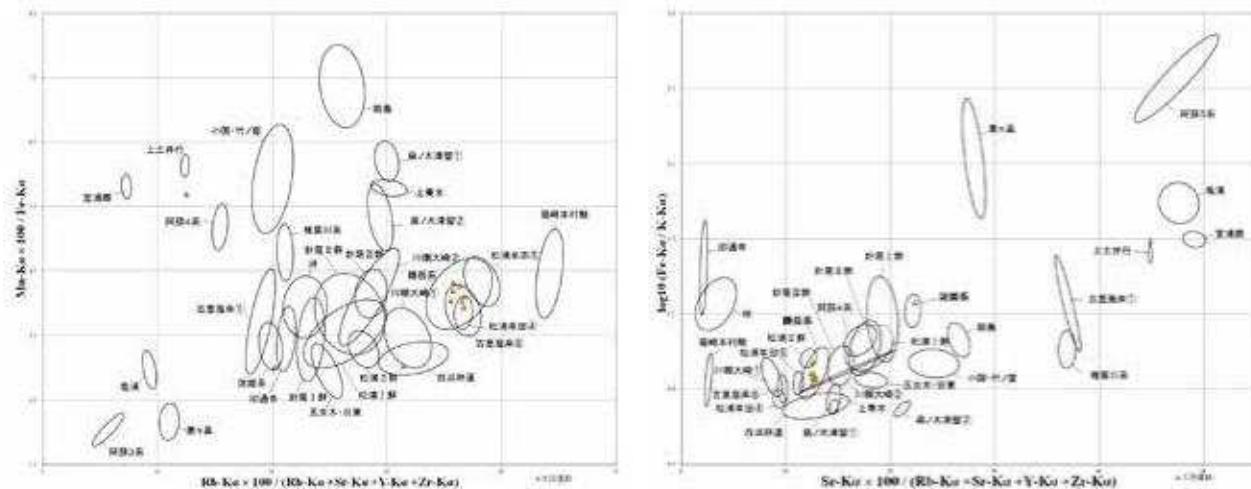


図 22 黒曜石産地推定判別図

IX. 総括

1. 縄文時代

今回の調査において縄文時代の遺物包含層や遺構は確認されなかったが、縄文時代後期～晩期を中心とした時期の石器や石材が出土した。最も古いものでは縄文時代草創期末に製作されたとみられる円刃が特徴的なスクレイパーが確認されている。

太田遺跡の所在する北松地域は、腰岳や星鹿半島といった良質な黒曜石や安山岩の産出地を擁するため、周辺遺跡において質のよい石材を用いた石器が多く確認されている。この遺跡で確認された石器についても黒曜石製の石匙や彫器・剥片鏃などが確認されているが、それ以上に多く確認された石材として玄武岩がある。北松地域一帯は砂岩や泥岩で構成される基盤層の上を玄武岩の溶岩台地が覆う地質構造をしており、太田遺跡周辺でも川底や崖に黒色の玄武岩が露出する地点がみられるため、玄武岩の入手は比較的容易だったと思われる。

2. 弥生時代

今回の調査で最も多く出土した遺物は弥生土器の欠片で、そのほとんどにローリングによる磨滅がみられる。どれも弥生時代中期中頃～後半のものとみられ、壺や甕の欠片が大半を占める。また、少數ながら甕棺の破片も確認された。口縁端部にノ状の刻み目がみられるものに関しては、太田遺跡周辺では里田原遺跡で確認されている。太田遺跡の遺物包含層はどの層も古墳時代のものと思われるが、これらの遺物が河川氾濫に伴う上流からの流れ込みだと考えるならば、竜尾川を南に遡り二ツ岳に至るまでの間に、甕棺墓を伴う遺跡が存在すること想定できる。

3. 古墳時代

古墳時代のものと思われる焼土を伴う遺構が複数確認されている。また、同じ層位から土師器の塊や壺および須恵器蓋坏が出土している。溝状遺構や土坑といった遺構の用途については不明であるが、SD1・SK1は確認された全ての焼土を伴う遺構よりも川に近い位置に存在しており、これらの遺構より西側は攢乱と水田面へ向かう段差のみが確認されている。この点から、SD1およびSK1が旧地形において川岸などの地形の変換点に作られた可能性がある。また、焼土を伴う遺構についても、土層中にまばらに焼土が確認できる程度で、明確な被熱面がみられるものは少ないため、恒常的な火處ではないことが想定できる。

時期については、良好な出土状況であった8層上面出土の須恵器蓋坏P7・P8・P9の型式およびその付近で採取した炭化材C1・C3・C5の放射性炭素年代測定の結果より古墳時代後半頃と思われる。

4. 古代以降

中世以降の遺物が数点確認されているが、その内の白磁2点について、それぞれ8層とTP2最下部のグライ層から出土している。8層出土のものに関しては、調査区西側の攢乱部分に近いため、攢乱土の除去が不十分だった可能性が考えられる。TP2グライ層から出土したものに関しては、TP2清掃時に5層などの上層のものが紛れ込んだ可能性が考えられる。黒色土器とみられる土師器皿675は、

高台の形態より黒色土器九州Ⅱ類Ⅲ期（8世紀中頃～後半）頃のものとみられる。出土層位が北区0505A6層下面であり他の遺物との時期差がある。北区6層については、中区以南の6層とは異なる層の可能性が考えられる。

5. 小結

今回確認された遺構および遺物包含層は全て古墳時代に帰属するとみられる。大枠で捉えると、東側の独立丘陵の裾部で旧河川の川岸に焼土を伴う遺構が点在し、それに伴って土師器の壺や塊、模倣壺、須恵器蓋坏がある程度のまとまりをもって出土している。

焼土を伴う遺構はどれも被熱が弱く恒常的でない小規模な火處であることも合わせ、いわゆる「川辺の祭祀」を想起させるようなものであった。類例などの具体的な検討に至れなかったため、今後の課題としたい。

【参考文献・資料】

- GSI HOME PAGE - 国土地理院「傾斜量図」<https://maps.gsi.go.jp/#13/33.351989/129.667986/&base=std&ls=std%7Cslopemap%2C0.5&blend=0&disp=11&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0f1&d=>
- 国土交通省国土政策局 GISHP『5万分の1都道府県土地分類基本調査（表層地質図）「唐津」長崎県（1974）』<http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/data/G/4222G.jpg>
- 国土交通省国土政策局 GISHP『5万分の1都道府県土地分類基本調査（表層地質図）「平戸」長崎県（1974）』<http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/data/G/4205G.jpg>
- 田平町教育委員会 2003『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書 第9集
- 長崎県教育委員会・松浦市教育委員会 1985『楼階田遺跡』長崎県文化財調査報告書 第76集
- 長崎県教育委員会 2012『中ノ瀬遺跡』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書 第7集
- 長崎県教育委員会 2013『今福遺跡』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書 第8集
- 松浦市教育委員会 1973『栢ノ木遺跡』
- 松浦市教育委員会 1988『小鳴古墳群』松浦市文化財調査報告書 第4集
- 松浦市教育委員会 1989『宮ノ下り遺跡』松浦市文化財調査報告書 第5集
- 松浦市教育委員会 1990『池田遺跡』松浦市文化財調査報告書 第6集
- 松浦市教育委員会 1990『田原積石塚・寺ノ尾C遺跡』松浦市文化財調査報告書 第7集
- 松浦市教育委員会 1997『田川遺跡』松浦市文化財調査報告書 第12集
- 松浦市教育委員会 1998『松浦・今福遺跡』松浦市文化財調査報告書 第14集
- 松浦市教育委員会 2001『田口高野遺跡』松浦市文化財調査報告書 第17集
- 松浦市教育委員会 2002『下谷遺跡』松浦市文化財調査報告書 第18集
- 松浦市教育委員会 2004『松浦市内遺跡確認調査（5）』松浦市文化財調査報告書 第20集
- 松浦市教育委員会 2009『松浦市内遺跡確認調査（2）』松浦市文化財調査報告書 第3集
- 松浦市教育委員会 2015『松浦市内遺跡確認調査（4）』松浦市文化財調査報告書 第6集



写真 8 試掘調査 SL1 検出状況（南から）



写真 9 表土掘削状況（北から）



写真 10 調査状況（南から）

写真図版 2



写真 11 TP1 北壁土層断面状況（南西から）



写真 12 TP1 東側拡張部土層断面状況（南から）



写真 13 TP2 北壁土層断面状況（南西から）



写真 14 TP2 東側拡張部土層断面状況（北から）



写真 15 TP17 北壁土層断面状況・須恵器出土状況（南西から）



写真 16 TP17 東側土層断面状況（南西から）

写真図版4



写真17 7層検出状況（北から）



写真18 完掘状況（北から）



写真19 SD1下層礫検出状況（北から）



写真 20 SK1 半裁状況（東から）



写真 21 SL2 半裁状況（北から）



写真 22 SL3 検出状況（北西から）



写真 23 SL3 半裁状況（北西から）



写真 24 SL4 検出状況（北東から）



写真 25 SL4 半裁状況（東から）



写真 26 SL5 検出状況（北から）



写真 27 SL6 半裁状況（西から）

写真図版 6



写真 28 SL7 検出状況（北から）



写真 29 SL7 半裁状況（東から）



写真 30 SL8 検出状況（西から）



写真 31 SL8 半裁状況（北から）



写真 32 塚 601 出土状況（北より）



写真 33 須恵器壺 701 出土状況（東より）



写真 34 出土石器（縄文時代）





写真 35 出土土器（弥生時代）

写真図版 8



写真 36 出土土師器・須恵器（古墳時代）

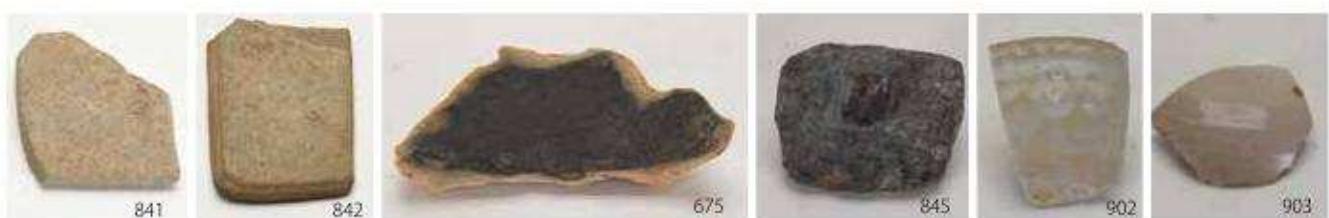


写真 37 その他の遺物

報告書抄録

ふりがな	おおたいせき
書名	太田遺跡
副書名	一般国道497号松浦佐々道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号名	第31集
編著者名	千原和己
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地1 電話 0920(45)4080
発行年月日	西暦2019年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおたいせき 太田遺跡	ながさきけんまつうらし 長崎県松浦市 みくわやまち 御厨町	42208	163	33° 20' 36"	129° 40' 20"	本調査 2018.7.4 ~ 2018.9.4	430 m ²	道路

取録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太田遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代・中世	焼土を伴う遺構 溝状遺構 土坑	石器(スクリイ バー・石匙・彫器・ 石斧・剝片) 弥生土器 土師器 須恵器 黑色土器 土師質土器 貿易陶磁(白磁)	須玖I式 須玖II式

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第31集
太田遺跡

2019(平成31)年3月15日

発行 長崎県教育委員会
長崎県長崎市尾上町3番1号

印刷 株式会社 昭和堂

